一 枯淚、題にきちかうと讀む
二 刈萱
三 憂らしき義也
四 イる
五 是より以下義通せず、他本を見合すべし
六 左將也
七 枠の事にや

菊の所々うつろひたる。二刈萱。龍膽は、枝ざしなどもむつかしげなれど、こと花皆霜枯れはてたるに、いと花やかなる色あひにてさし出てたる、いとをかし。わざとと り立てて、人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり。名ぞうたてげなる。雁の來る花と、文字には書きたる。かにひの花、色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、春と秋と咲く、をかしげなり。四壺菫、菫同じやうの物ぞかし、五老いていけばおしなどうし。しもつけの花。夕顔は朝顔に似て、いひ續けたるもをかしかりぬべき花の姿にて、にくき實の有樣こそ、いと口をしけれ。などてさはた生ひ出てけむ。あかづきなどいふ物のやうにだにあれかし。されど猶、夕顔といふ名ばかりはをかし。

○なでしこ、からのはさら也——唐撫子、和撫麥とてあり。

○をみなへし——女郎花文集、女倍之新撰萬集。

○菊の所々うつろひたる——古今集秋下。平貞文、「秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつろふからに色のまされば。」

○りんだう——龍膽也、古今の物名に、「花ふみちらす鳥うたむ」とよめり。基俊の悅月抄に、「りんだうの花を手向くるき法師の經よむこゑはたふとかりけり」と俳諧歌によめり。

○かまつかの花——すなはち此の草紙に、雁の來る花と書くよしい り。世に

雁來紅といふ物にや。

○かにひの花——古今の物名にあり、雁緋也、よのつねのがんひは、藤にも似ず春秋にもさかず。但異本に、かるひの花とあり、是は雁緋にはあらで、別の物にや。

○しもつけのはな——花うす紫にて、こでまりに似たり。拾遺の物名に、「植ゑてみる君だにしらぬ花なれば我しもつけむ事のあやしさ」とよめる物也。

○にくきみのありさま——夕顔の實は瓢也。なりひさごといふ物なり。

○などてさはたおひ出でけむ——いかでかさやうには、又生ひ出でし事ぞと也。

七枠の花、更に見どころなけれど、みてぐらなどいはれたる、心ばへあらむと思ふに、ただならず。もじも薄には劣らねど、水のつらにて、をかしうこそあらめと覺ゆ。「これに薄を入れぬ、いとあやし」と人云ふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは、薄にこそあれ。穗さきの蘇枋にいと濃きが、朝霧に濡れて、うち靡きたるは、さばかりの物やはある。秋のはてぞ、いと見所なき。色々に亂れ咲きたりし花の、かたもなく散りたる後、冬の末まで、八頭いと白く、おほどれたるを知らで、昔思ひ出で顏に靡きて、かひろぎ立てる、人にこそ、いみじう似たれ。よそふる事ありて、それをしもこそ、あはれとも思ふべけれ。萩はいと色深く、枝たをやかに咲きたるが、朝露に濡れて、なよ〳〵とひろごり伏したる。さを鹿の分きて立ち

七 例の書きて、したる文體にや
八 山石榴 ツヽジ
九 本歌可勘
一〇 人にけぢかき心にや
一一 枝に針のある事也
一二 水のほとり也
一三 黒木は皮つきの木也
一四 夕映、夕榮、夕に色のます也

ならずらむも、心ことなり。唐葵はとりわきて見えねど、日の影に隨ひてかたぶく らむぞ、なべての草木の心とも覺えてをかし。花の色は濃からねど、咲く山吹には。岩躑躅もことなる事なけれど、「折りもてぞ見る」と詠まれたる、さすがにをかし。ざうびは、近くて、枝の樣などはむつかしけれどをかし。雨など晴れ行きたる水のつら、黒木のはしなどのつらに、亂れ咲きたる夕ばえ。

○みてぐらなどに――御幣也、蘆の花のさま御幣に似たればなるべし。本語あるか可勘。

○もじもすゝきには――文字なりも、蘆と薄とをとらぬと也。イ本 もえしもすきにはとあり。萠え出でくるかたちの、薄にをとらぬと也。

○ほさきのすはうに、いとこき――穗の色の蘇枋に染みしやうなる也。是をすうのすゝきといふ也。

○おほどれたるをもしらで――源氏あづまやに、おほどれたるこゑしてとあり。孟津抄に、おほどけたる也とあり。薄の穗のそゝけひろごりたるなり。あしきをもしらで、猶はつをばなのむかしおもひ出でがほになびくと也。

○かひろぎたてる人にこそ――かゝひろごりたてる人のありさまに似たると也。

○よそふる事ありて――此の薄を老いはてたる物のさまなどに、思ひよそふる

事あらば、哀ならむと也。

○さをじかのわきて――後撰、貫之、「行きかへり折りてかざさむ朝な〳〵鹿たちならすのべの秋萩」又「さを鹿の立ちならすをのの秋萩におけるしらつゆ我もけぬべし。」

○からあふひ――唐葵、催馬樂淺緣の詠物に、からほひとあるも是也。童蒙抄云、向日葵とて日の影にかたぶく也云々。文選廿九、陸士衡園葵詩、種二葵此園中一、葵生欝萋々、朝榮東北傾、夕顯西南晞、註李善曰、淮南子曰、聖人於レ道猶二葵之與レ日。

○いはつゝじ――白氏文集十二云、山石榴、一名山躑躅、一名杜鵑花、杜鵑啼時花樸々。

○くろきのはしのつら――黒木階面也、麁相なる階のほとり也。朗詠云、階底薔薇人レ夏閒。

五十九

おぼつかなき物　十二年の山ごもりの法師のめおや。知らぬ所に、闇なるに行きたるに、あらはにもぞあるとて、火もともさで、さすがに並みゐたる。今出できたる者の心も知らぬに、やむごとなき物もたせて、人のがりやりたるに、遲く歸る。物

一 イニゆきあひたるこゝあり可用歟
二 しらぬ人々に

火あかくては、あまり顯證ならむとて態と火とも さで也

三 並居也

四 此の頃來たる蕊者の事也

五 反覆也

六 うつくしき色も見えねば也

いはぬ乳兒のそりくつがへりて、人にも抱かれず泣きたる。暗きに苺食ひたる。人の顏見知らぬ物見。

○おぼつかなき物——物の分明ならず、心もとなき心也。

○十二年の山ごもりのほうしのめおや——後撰集十の詞書に、「男のほど久しうありてまうできて、御心のいとつらさに、十二年の山籠りしてなむ、久しうきこえざりつる」と云々。比叡山などに禁足してこもる事也。此の草紙の心は、山法師の久しく禁足してあるに、父は行きても相見るべきを、母は登山かなはねば、十二年のほど、最もおぼつかなかるべし。

○やむごとなき物もたせて——無止ヤムゴトナキ 江次第書けり。こゝは大事におもふ物を持たせて、他所へやりし也。

○人のかほ見しらぬ物見——祭の供、伶人なども、見知りてこそは一入おもしろかるべければ也。

六十

たとしへなき物 夏と冬と。よるると晝と。雨降ると日照ると。若きと老いたると。人の笑ふと腹立つと。黑きと白きと。思ふと憎むと。藍と黃蘗と。雨と霧と。同じ人ながらも心ざし失せぬるは、まことにあらぬ人とぞおぼゆるかし。常磐木多かる

一 たとへむかたなくかはりたる心也

二 藍

三 黃蘗

所に、烏の寢て、夜中ばかりに、いねさわがしく落ちまどひ、木づたひて、寢おびれたる聲に鳴きたるこそ、晝のみめにはたがひてをかしけれ。

○あめと霧——イ本 此の次に、火と水と、肥えたる人とやせたる人と、髮長き人とみじかき人とあり。

○おなじ人ながらも、心ざしうせぬるは——白氏文集大行路に、人心好惡苦不レ常、好生二羽毛一惡生レ瘡。又云、妾顏未レ改君心改。又云、君不レ見左納言右內史朝承レ恩暮賜レ死、行路難不レ在レ水不レ在レ山、只在二人情反覆間一といへるさまに似たり。

○いねさわがしく——いねわろき事也。 イニ いねさがなくとあるもおなじ。

六十一

忍びたる所にては、夏こそをかしけれ。いみじう短き夜の、いとはかなく明けぬるに、つゆ寢ずなりぬ。やがてよろづの所あけながらなれば、涼しう見渡されたり。猶今少しいふべき事のあれば、かたみにいらへどもする程に、ただ居たる前より、烏の高く鳴きて行くこそ、いと顯證なる心地してをかしけれ。多のいみじく寒きに、思ふ人とうづもれ臥して聞くに、鐘の音の、ただ物の底なき樣に聞ゆるもをかし。鷄の聲も、はじめは羽のうちに、口を籠めながら鳴けば、いみじう物深く遠

一 人に忍びて逢ひたる所也

二 たがひにむつごとのさしいらへする也

三 イうへ

四 あらはなる事也

五 衾にまつはれて也

四 是烏のうへにてたとしへなき事をいふ也

五 イさがなく

六 イろ

七 ねまどひし也

八 烏のひるのさまとたとしへなき心也

六 ふすまのうちにてきくゆゑ也
七 こゑのあざやかなるをいふ也

枕草子

一 懸想、我に心をかけてきたる人也。
二 來也
三 彼の來たる人の供也
四 イをのこわらはなどのうきけしき見るにをのえも不情がるさま也
五 イあくびて
七 密也、おのれはひそかにいふと思ふらめども、

きが、つぎ〳〵になるまゝに、近く聞ゆるもをかし。

○忍びたる所にては——是より又別の事の、鳥の興ある事をいふ筆すさび也。

○冬のいみじく——前に夏の夜の事をいひたれば、こゝは又冬の事をいふ也。

○つぎ〳〵になるまゝに——次々也、世に一番鷄、二番鷄などいふ次第々々也。

六十二

懸想人にて來たるは、いふべきにもあらず。ただうち語らひ、又、さしもあらねど、おのづから來などする人の、簾のうちにて、數多人々居て物などいふに、入りて、とみに歸りげもなきを、供なるをのこ、童など、斧の柄も朽ちぬべきなめりとむつかしければ、長やかにうちながめて、みそかにと思ひていふらめども、「あなわびし。煩惱苦惱かな。今は夜中にはなりぬらむ」など云ひたる。いみじう心づきなく、かのいふ者は、とかくも覺えず。此の居たる人こそ、をかしう見聞きつる事も失する樣に覺ゆれ。又、さは色に出ててはいはずあると、高やかにうち呻きたるも、「下行く水の」と、いとをかし。立蔀、透垣のもとにて、「雨降りぬべし」など聞えたるも、いとにくし。よき人、君達などの供なるこそ、さやうにはあらぬ。ただ人などさぞある。數多あらむ中にも、心ばへ見てぞ率てありくべき。

枕草子

一 煩惱
二 苦惱也
三 下人の事なれば、さして心なしともおぼえずと也
四 かやうの下人を具せし主人こそ也
五 三日頃此の人をかしと見聞きし興もさむること也
六 是も供人の詞也
七 こなたへきこえよとおもふさまなるべし
八 清少の心也、いはぬは猶いふにまさるものをと也
九 是も供人の主をおどろかし催こなたへ聞ゆること也
一〇 供の者のいふ事也
一一 煩惱
一二 苦惱也
一三 下人の事なれば、さして心なしともおぼえずと也
一四 かやうの下人を具せし主人こそ也
一五 三日頃此の人をかしと見聞きし興もさむること也
一六 是も供人の詞也
一七 こなたへきこえよとおもふさまなるべし
一八 清少の心也、いはぬは猶いふにまさるものをと也
一九 是も供人の主をおどろかし催

○けさう人にて——此の段は供なる人の心なきを、つれまじき事をいふに、懸想人の供の心なきは勿論、只かたらふ人などの供の、心なきもわろき事をいふ也。

○すのうちにてあまた人々——清少は簾中にて、女房どち物がたりするに、彼の來たる人も入りて、頓にも歸るけしきなげなる也。

○をののえもくちぬべき——河海云、六帖、「をののえはくちなば又もすげかへむうき世の中にかへらずも哉」晉の王質が石室山にいたりて、一局の碁を見るほどに、斧の柯の朽ちたりし事也、述略記に委し。

○ながやかにうちながめて——をののえも朽ちぬべしと、詠吟せし也。イ本うちあくびては、長あくびする也。

○又、さはいろにいでては、えいはず——さやうに我らは、煩惱、苦惱など、詞にいでてはえいはずと、おとなしやかにいふ也。是もいはぬやうにて、あていふ詞也。

○したゆく水のと——六帖、「心にはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまさる此のうたは、ならの帝盤手といふ鷹を愛して、大納言にあづけさせ給へるに、大納言其のたかをそらして、え尋ね出でざる事を奏し申されたれば、帝物もの給はせ給はで、「いはでおもふぞいふにまさる」との給ひしに、

す詞也
六供人也
七只人の供は、さやうに心づきなきこと也
八將也

後人上の句をさまざまつけたるよし、大和物語にあり。

○すいがい――透垣也。

○あまたあらむ中にも――あまた下人あらむ中にても、さやうに心なき者には あらぬと、心ばへをよく見て、召しつれありくべき事ぞと也。

春曙抄三終

一銀は性にぶくて鐵に及ぶねばき也
二從者也
三辭
四片輪
五少しも瑕瑾なき人實に有りがたかるべし
六たがひに也
七油斷なく心づかひする也
八實に有りがたけれといふ心也
九集也
一〇本
一一有りがたしと也
一二從者也
一三擇練、紅の衣

枕草子春曙抄　巻四

六十三

ありがたきもの　舅に譽められる婿。又、姑に思はるる嫁の君。ものよく拔くるしろがねの毛拔。主そしらぬ人の從者。露の癖かたはなくて、かたち心ざまもすぐれて、世にあるほど、いさゝかの瑕瑾なき人。おなじ所に住む人の、かたみにはぢかはし、いさゝかの隙なく用意したりと思ふが、遂に見えぬこそかたけれ。物語、集など書きうつす本に墨つけぬ事。よき双紙などは、いみじく心して書けども、必ずこそきたなげになるめれ。男も、女も、法師も、ちぎり深くて、かたらふ人の、末まで中よき事かたし。使ひよきずんざ。擇練うたせたるに、あなめでたと見えておこす。

○しうとめにおもはるゝよめのきみ――莊子が外物篇に、婦姑勃磎といへるに似たり。唐夫人の姑に乳をふくめしたぐひ。誰もこひねがふべき事也。

○おなじ所にすむ人の――人馴れては、おのづから敬の心おとろへて、たがひに恥づる心なくなる物なれば也。論語に晏平仲善與レ人交、久而敬レ之と孔子の

服也、それを打殿にてうたせてつやを出す也
一四有りがたしとふくめたり

ほめ給へる、まことにありがたき事なるべし。佛道にも慚愧は衆善之衣服といへり。慚はみづから恥ぢて惡行をせぬ也。愧は他人をはぢて惡事をやむる心也。人として此の慚愧の二つなくば、世間は父母兄弟妻子もなく、知識尊長大小の分ちもなくて、畜生と同等也と經に說けり。

○男も女も法師も契ふかくて――男女の中にかぎらず、法師もよく契りかたらふを和合僧といへり。大和物語に、のうさんの君といひける人、淨藏とはいとになう思ひかはす中なりけり。かぎりなく契りて思ふかたをもいひかはしけり云々。

○かいねりうたせたるに――源氏末摘花に、かいねりこのめるとあり。河海云、搗練は兩面ふくさ張にて中重なし。紅色也。玉葛卷の河海云、打殿張殿などとてあり。男女の裝束。うちのり本體也。板びきのりなどは略儀なり云々。

六十四

一是より別に禁中の局の事をいふ也
二上小蔀、是より以下はそどのやうに、のよき故をいふ

内の局は、細殿いみじうをかし。かみの小蔀あげたれば、風いみじう吹き入りて夏もいと涼し。冬は雪、霰などの、風にたぐひて入りたるも、いとをかし。せばくて、童などののぼり居たるもあしければ、屏風の後などに匿しすゑたれば、こと所のやうに、聲たかく笑ひなどもせで、いとよし。畫などもたゆまず心づかひせら

人々也
三里の親類などの童なるべし
四牧の童をかくしおく也
五禁中の密なれば、童も心する也
六宮仕の心也、禁中なれば晝夜敬心に油斷なき也
七禁庭を行きかふ人の沓の音也
八小指
九戸を叩く音
一〇そらねしたるさま也
一一句
一二身動、身うごかす也
一三それなりと也、ねいらぬと推せんと也
一四戸たゝきし人の扇をつかふ也
一五是も内のさまを外にてねいら

る。夜はたまして、いさゝかうちとくべくもなきが、いとをかしきなり。沓の音の夜ひと夜聞ゆるがとまりて、只および一つして叩くが、その人ななりと、ふと知るこそをかしけれ。いと久しく叩くに、音もせねば、寢いりにけるとや思ふらむ。ねたく、少しうち身じろぐ音、衣のけはひもさななりと思ふらむかし。扇など使ふもしるし。冬は火桶に、やをら立つる火箸の音も、忍びたれど聞ゆるを、いとど叩きまさり、聲にてもいふに、かげながらすべりよりて聞く折もあり。

○ほそどの――素殿河海、三光院御說、廊、ホソドノとよめり。舊記に、廂をホソドノと點ず。是も其の心か前註。

○とまりてただおよび一つしてたゝくが――ほそどのの淸少の局へ忍びてくる人の沓の音の、この局の前にてとどまりて、ひそかに小指にてたゝく也。戸をたゝく也。

○さななりとおもふらむかし――内に身うごかし、衣の音などするは、ねいらぬとやねたくも推しつらむ。扇をつかひなどけしきばむさまも、しるくきこゆると也。

又、あまたの聲にて、詩を誦し、歌などうたふには、叩かねどまづあけたれば、こへとしも思はぬ人も立ちとまりぬ。入るべきやうもなくて、立ちあかすもをかし。御簾のいと青くをかしげなるに、几帳の帷子いとあざやかに、裾のつま少しう

ぬと聞きし心也
一四聲にてもこゝあけ給へといふ也
一七内より物除によりて、其のさまをきく也
一師也
二詩歌の詠に感じてあくる也
三こゝろざしありてきたるにあらねば也
四最也
五是より男たちのさま也
六不絶
七麁麻の袍也、前註
八陸也
九イかたに
一〇壓によりゐしさま也
一一押
一二最濃也、紫のこき色也
一三鰐を押し入れ

ち重りて見えたるに、直衣の後に、ほころび絶えず着たる君達、六位の藏人の青色など着て、うけばりて、遣戸のもとなどにそばよせてえたてらず。へいの前などにうしろ押して、袖うちあはせて立ちたるこそをかしけれ。又、指貫いと濃う、直衣のあざやかにて、いろ〳〵の衣どもこぼし出でたる人の、簾をおし入れて、なから入りたるやうなるも、外より見るは、いとをかしからむを、いときよげなる硯ひきよせて、文書き、もしは鏡乞ひて、鬢などかきなほしたるも、すべてをかし。三尺の几帳をたてたるに、帽額のしもは唯少しぞある。外に立てる人、内に居たる人と物いふ顔のもとに、いとにくくあたりたるこそをかしけれ。長のいと高く、短からむ人などやいかがあらむ。猶よのつねのは、さのみぞあらむ。

○又あまたのこゑにて詩をずし——是は忍びて來る人にはあらで、ただあひかたらふ人々の聲をききしさまなるべし。

○こゝへとしもおもはぬ人も——此の方より戸をあけたれば、この局へこむとは思はぬ人も、先づ立ちとどまると也。

○すそのつますこしうちかさなり——几帳のもとより、女房のきぬのすそのはづれのすこし見ゆるさま也。

○うけばりて——河海云、諾〻、承諾、はばかる事もなきをいふ也。我はと思へる體也。此双紙の心はさやうに我はがほにはえたてらず、少しそばめゐたるさま

一て、半身内へ入りたるさま也
二外より見ては優ならむと也
三半身入りたる人のさま也
四鏡をこひよせかりて也
五幅額也
六簾巻きあげたるさまにや
七たいていのせいたけの人にはみな額のほどに几帳のあたらむと也
一臨時の祭の調樂也
二炬火也
三寒き夜の體にや
四炬火のさきの物に近きさま也
五管絃のはじまる也
六イたてて
七調樂に參らる

也。

○袖うちあはせて——袖かき合せてといふ心也。つゝしめるさま也。

○いろ〳〵のきぬどもこぼし出——さしぬきのわきなどより、下着の色々に見えたるさまなり。

○物いふかほのもとに、いとにくくあたり——外の男、内の女と物いふ顔の程に、彼の三尺の几帳のあひあたり隔たるゆゑに、にくくといふ也。

○たけのいとたかくみじかからむ——背たけのすぐれて高き人と、一向にせいの短き人などは、何も几帳にはづれやせむ、いかがあらむと也。

○物云ひなどするに、殿上人の隨身どもの、さきを忍びやかに短く、おのが君達のれうに追ひたるも、あそびにまじりて、常に似ず、をかしう聞ゆ。夜更けぬれば、猶あけて歸るを待つに、君達の聲にて、「あらたに生ふるとみ草の花」と歌ひたるも、此の度は、今すこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ。すくすぐしうさし歩みて出でぬるもあれば、笑ふを、「しばしや。など、さ夜を捨て急き給ふ。とありて」などいへど、心地などや惡しからむ、倒れぬばかり、もし人や追ひて捕ふ

まして、臨時の祭の調樂などは、いみじうをかし。とのもりの官人などの、長き松を、高くともして、頭はひき入れて行けば、さきはさしつけつばかりなるに、をかしうあそび、笛ふき出でて、心ことに思ひたるに君達の日の裝束して、立ちとまり物云ひなどするに、殿上人の隨身どもの、さきを忍びやかに短く、おのが君達のれうに追ひたるも、あそびにまじりて、常に似ず、をかしう聞ゆ。夜更けぬれば、猶あけて歸るを待つに、君達の聲にて、「あらたに生ふるとみ草の花」と歌ひたるも、此の度は、今すこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ。すくすぐしうさし歩みて出でぬるもあれば、笑ふを、「しばしや。など、さ夜を捨て急き給ふ。とありて」などいへど、心地などや惡しからむ、倒れぬばかり、もし人や追ひて捕ふ

ると見ゆるまで、まどひ出づるもあめり。

○まして――前にすべてをかし、をかしけれなどあるをうけて、ましてと也。

○りんじのまつりのてうがく――宗祇、帚木の別勘云、臨時の祭とは北祭の事也。十一月酉也。調樂は午の日也。大内にてある事也。愚案 江次第十曰、寛平元年十一月廿一日有二賀茂臨時祭事一、右近中將藤原時平爲レ使云々。これ初めにや、猶其の次第等委し。其の祭に舞樂あるを禁中にて先づ試樂有りて、次に調樂とて、樂人舞人等をとゝのへさせ給ふ事也。

○とのもりの官人などの長き松――主殿司は炬火庭火などをつかさどる者也。江次第臨時祭の試樂に、主上入御の時若及二昏黒一主殿官人奉二炬火於庭中一とあり。これ調樂の時ならねども、大かた其のさま是に准へて知るべし。

○日のさうぞく――源氏には日のよそひとあるを、細流に束帯也。直衣は宿衣也。東帯は晝のよそひ也。

○殿上人の隨身ども――中將、少將などの召し具せられし隨身也。イ本 供の隨身とあるは彼の君達の隨身也。

○あらたに生ふるとみ草の花――うたひ物なるべし。大鏡云、「一條院の御時の臨時の祭に御前の事果て、上達部たちの物見に出で給ひしに、外記のすみのほど過ぎさせ給ふとて、わざとはなくて口ずさびのやうにうたはせ給ひし。とみ

1 人々也
2 束帯の事也
3 イ供のすゑじんども
4 ひそかに警蹕(ケイヒツ)する也、てうがく始れば高くはさきをおはで、我主君のためばかりに聞(シツカ)に聞みじかくさきおふ也
5 音樂の事也
6 夜明けて舞人樂人などの歸るを見むと待つ也
7 舞人也、きすぐなる人也
8 事果てたりとて急ぎ出づるなるべし
9 しばし待ち給へと也
10 何とてさやうに猶明けぬ夜を見捨て、急ぎ給ふぞと也

11 倒れぬべきぼど急ぐ也

草の花てにつみいれて、宮へまゐらむのほどを、例のには、かはりたるやうに承りたりし云々。是此の双紙とおなじ詠物のつづきなるべし。とみ草は、稲の事と梁塵愚案抄にあり。

○とありてなど――しばし有りてと也。とばかりありてなどいふと、おなじ心なるべし。

六十五

職の御曹司におはしますころ、木立などはるかに物ふり、屋のさまも、高うけどほけれど、すづろにをかしう覺ゆ。身屋は鬼ありとて、皆へだて出だして、南の廂に御几帳たてて、又廂に女房はさぶらふ。近衛の御門より、左衛門の陣に入り給ふ上達部のさきども、殿上人のはみじかければ、おほさき、こさきと聞きつけて驚く。あまた度になれば、其の聲どもも皆聞き知られて、「それぞ、それぞ」と云ふに、又「あらず」など云へば、人して見せなどするに、云ひあてたるは、「さればこそ」など云ふもをかし。

有明のいみじうきり渡りたる庭に、おりてありくを聞し召して、御前にも起きさせ給へり。うへなる人は、皆おりなどして遊ぶに、やう〳〵明けもてゆく。左衛門の陣にまかりて見むとて行けば、我も〳〵と追ひつぎて行くに、殿上人あまた聲して

1 是よりの又別段也
2 中宮の定子のおはす也
3 木立也
4 屋鬼の樣體也
5 イけうどくすずろう
6 そぞろ也
7 中宮の御座なるべし
8 陽明門也、前註
9 建春門也、前註

一〇是ゝ聞（サキノ）聲也
一一隙聲に付きて其人ぞかの人ぞと・おしはかりにいふ也
一二それにはあらずとあらそふもある也
一三清少等の女房のおりて月見ありく也
一四后宮にもおきさせ給ふ也
一五イ人々のかぎりはみな
一六夜明也
一七清少などのゆくに其の外の女房も追々に行く也
一八何々一聲の秋といふ心也
一九イまゐる
二〇殿上人の女房達の月見るにめでて歌よみかけしもありと也

「なにがし一聲の秋」とずんじて入る音すれば、にげ入りて物など云ふ。「月を見給ひける」などめでて、歌よむもあり。夜も晝も、殿上人の絶ゆる折なし。上達部まかで參り給ふに、おぼろげに急ぐことなきは、かならずまゐり給ふ。

○もやはおにありとて——化生の物ありとておそれて歸りて也。南殿の鬼の貞信公をおびやかし、河原院の靈の京極の御息所をとりいれし類。古今著聞第十七變化の部に、猶此のたぐひ多し。

○殿上人のはみじかければ——上達部と殿上人とは隨身の隱聲も差異あるにや。前にも殿上人の隨身どもさきを忍びやかにみじかくとあり。

○おほさきこさき——上達部の前詞を、大さきといひ、殿上人のを、こさきといふとかや。みな隨身の故實なるべし。

○あまたたびになれば——其の聲度々きけば、其の聲を女房の皆聞き知りて也。

○なにがし一こゑの秋——古詩を朗詠する也。是河原院にて夏日閑避レ暑といふ題を、源英明、池冷水無二三伏夏一松高風有二一聲秋一といへる句を、何々一聲の秋と、やはらかに書きたる文の一體なるべし。

○まかでまゐり——上達部の禁中を退出し、又參內せらるるに、大かたに急なる公用などなきは、后宮へ參上と也。后宮の御威勢をいふなるべし。

一　此詞にて清少
二　イよ
三　大かたにて也
一　出だしたてし心なるべし
二　鬱、宮づかへをうんじたるさま也
三　あじきなき心をふくめし也
四　兼子の顏の我にやさしからぬ也
五　はじめより解にならんとも思はざりし人也

六十六

あぢきなきもの　わざと思ひたちて、宮仕に出で立ちたる人の、ものうがりて、うるさげに思ひたる。人にもいはれ、むつかしき事もあれば、「いかでかまかでなむ」といふこと草をして、出でて親をうらめしければ、「また參りなむ」と云ふよ。とりこの顏にくさげなる。しぶ〳〵に思ひたる人を、しのびて聟にとりて、思ふさまならずとなげく人。

○わざとおもひたちて——親の態々思ひたちて、禁中へまゐらせしむすめ也。

○人にもいはれ、むつかしき事も——宮仕うるさげ也と人にもいひたてられ、我も實に物うければ也。

○いかでかまかでなむといふことぐさを、して出でて——何とぞして里へ退出せむとつねの言種にいふ也。ことぐさは口ずさびに常に云ふ也。

○おやをうらめしければ——里亭へ出でても、親は宮仕を物うげなりと、いさめなどして、うらめしければ也。

六十七

いとはしげなきもの　人によみて取らせたる歌の譽めらるる、されど、それはよ

の頓着なき本性見えて奇特にや
二 遠國へ下る人也
三 人のもとへ也
四 等閑と書く、心にもいらぬ事なれど、大かたに書きてやりし也
五 無德也。せんなきさまにいひなす也

し。一遠きありきする人の、つぎ〳〵縁たづねて、文得むといはすれば、知りたる人のがり、なほざりに書きて遣りたるに、なまいたはりなりと腹立ちて、返事もとらせで、二むとくにいひなしたる。

○三いとほしげなきもの——をしからぬ心もあり。愛想なきこゝろもある也。

○されどそれはよし——人のためにして其のかひあればよしと也。此次に人のためにしても其のかひなき事をいはんとて也。

○つぎ〳〵えんたづねて文えむと——清少へ付々の縁を求めて、彼の遠國に清少の知人の方へ、四狀をそへよと望む也。

○なまいたはりなりと——彼の知人文體のいたはりなきに腹立ちして、返事もせぬ也。もとより心にもいらで等閑に出だしし添狀なれば、返事なくてもをしげなきとの心也。

六十八

一 いほうし

心地よげなる物　卯杖のことぶき。神樂の人長。池のはちすの村雨にあひたる。御靈會の馬長。又、御靈會の振幡。

○うづゑのことぶき——卯杖は正月上の卯日、東宮を始め奉り、左右の兵衛府、作物所などより、大内へたてまつる事也。祝の杖とも歌によめば、其の祝

言也。江次第二裏書云、仁壽二年正月諸衛獻二祝杖一、逐二魅魎一云々これ也。

卯杖とて桃椿などにてつくれる杖也。イニうつゑのほうし、追而可考。

○神樂のにんぢやう——人長は神樂の舞人、陪從などの長也。内侍所の御かぐらに、韓神、其駒などの時起つて舞ふもの也。内侍所の御神樂は、一條院の御時はじまれるよし江次第にあり。其次第等猶くはし。

○御りやうゑの馬をさ——六月十四日祇園の御靈會に、禁中より馬をむかしはひかれし也。公事根源云、祇園御靈會十四日、此のまつりの日禁中にはことなる事なし。馬長など催しつかはさるれども御覽はなし。祇園の社は貞觀十一年に託宣の事ありて、山城の國には、うつし奉りしにや。素盞嗚尊の童部にて、牛頭天王とも武塔天神とも申す也云々。

○又御靈會のふりはた——是も祇園會に。むかし振幡といふ事ありしにや。今は絶えたる儀式にて知りがたし。

六十九

一 ことり

とりもてろもの　傀儡のことゝり。除目に第一の國得たる人。

○とりもてる物——此の詞異本にはなくて、くぐつのことゝりをも、前の心ちよげなる物の内に書きつらねたり。

○くぐつのこととり――傀儡の琴取にや、イ本くぐつのことりとあり、可尋之。

○除目に第一の國得たる――正月あがためしの除目に、大國などの受領に成りたる事なるべし、大國、上國、中國、下國とてあり。職原抄に委し。

七十

御佛名のあした、地獄繪の御屏風取り渡して、宮に御覽ぜさせ奉り給ふ。いみじうゆゝしき事限りなし。「是見よかし」と仰せらるれど、「更に見侍らじ」とて、ゆゝしさに、うへ屋に隱れふしぬ。雨いたく降りてつれづれなりとて、殿上人、うへの御局に召して、御あそびあり。道方の少納言琵琶、いとめでたし。濟政の君箏の琴、行成笛、經房の中將笙の笛など、いとおもしろうひとわたり遊びて、琵琶ひきやみたる程に、大納言殿の、「琵琶の聲はやめて、物語すること遲し」といふ事をずんじ給ひしに、隱れ伏したりしも起き出でて、「罪はおそろしけれど、猶物のめでたきは、えやむまじ」とて笑はる。御聲などのすぐれたるにはあらねど、折のこと更に作りいでたるやうなりしなり。

○御佛名のあした――是より例の物がたり也。十二月の御佛名三ヶ夜過ぎて明朝の事なるべし。年中行事歌合註云、佛名は十九日より廿一日まで三ヶ日の

一 イ又の日
二 イちごくの丞の
三 地獄のありさま也
四 后宮の濟少に仰せらるゝ也
五 禁中にての濟少の局にや
六 后宮の御局へ帝の召す也
七 道方六條左大臣重信六男正二位中納言
八 濟政道方ノ弟阿波權守
九 箏也
一〇 行成卿にや

間、三世の諸佛の御名を唱へて六根の罪を懺悔し侍る心也。寶龜五年十二月よりはじまる云々。佛名の裝束は延喜式圖書にあり。江次第に猶委し。

○ぢごくゑの御屏風とりわたし――御佛名の所より、后宮の御かたへ取りわたして見せまゐらせ給ふ也。雲圖抄佛名の所に云、以二地獄變御屏風七帳一立二七夕之間一有二綱鎭子等一。或書云、若無二件御屏風一之時、用二漢書御屏風一云々。榮花物語第三さまざまの悅の卷に、十二月の十九日になりぬれば、御佛名とて地獄繪の御屏風などとう出てしつらふとあり。

○びはのこゑはやめて――琵琶行云、忽聞二水上琵琶聲一、主人忘レ歸、客不レ發、尋レ聲闇問彈者誰、琵琶聲停欲レ語遲。この句を誦し給ふ也。

七十一

頭中將のそぞろなる虛言を聞きて、いみじういひおとし、「何しに人と思ひけむ」など、殿上にても、いみじくもなむの給ふと聞くに、はづかしけれど、「まことならばこそあらめ、おのづから聞きなほし給ひてむ」など笑ひてあるに、黑戸のかたへなど渡るにも、聲などする折は、袖をふたぎて、露見おこせず、いみじうにくみ給ふを、とかくもいはず、見もいれで過ぐす。

○頭中將――勘物云、齊信卿正暦五年八月廿八日、藏人頭。長德二年四月廿四

二 經房は西宮左大臣高明ノ三男長保三年八月廿五日任ニ左近中將一
三 笙也
三 伊周公なるべし
四 文集の琵琶行の語(ゴ)を詠吟也
五 前に濟少のうへ屋にかくれふしぬと有りし也
六 塊ごくのゑは見ずして、此詠吟に感ずれば也
七 人々に笑はれし也
八 大納言の詠吟の事也
一 是より別段也
二 濟少の事を誰にても讓せしなるべし
三 濟少をいひくたし給ふ也

四 清少の傳聞也
五 議人のいひなしなれば
六 清少の行きかよふ也
七 清少其のいひわけもせず見いれざる也
一 イの頃
二 禁中の御物忌に頭中將こもりて也
三 清少の詞也
四 答也
五 長押の下は敷居一つへだてて次の間也。禁秘抄に、帳南、西北敷畳、皆ニ女房座ニ云々。是にや
六 女房達清少のきたるをよろこぶ也
七 清少の心也、后宮のおはせね

日、任二参議一卅歳云々。恒徳公三男也。

○くろどのかた――黒戸也。清涼殿の北の瀧口の戸の西なる由拾芥にあり。

○こゑなどするをりは袖を――清少の聲すれば、頭中將やがて顔に袖をおほひて清少を見給はぬ也。

二月つごもりかた、雨いみじう降りてつれづれなるに、御物忌にこもりて、『さすがにさうざうしくこそあれ。物やいひにやらまし』となむの給ふ」と、人々語れど、「よにあらじ」などいらへてあるに、一日しもに暮して參りたれば、よるのおとどに入らせ給ひにけり。長押のしもに、火近く取りよせて、さしつどひて、扁をぞつく。「あなうれしや。とくおはせ」など見つけていへど、すさまじき心地して、何しにのぼりつらむとおぼえて、炭櫃のもとに居たれば、又、そこにあつまり居て物などいふに、「何がしさぶらふ」といと花やかに云ふ。「あやしく、いつの間に何事のあるぞ」と問はすれば、主殿司なり。「ただこゝに人づてならで申すべき事なむ」といへば、さし出でて問ふに、「是頭中將殿の奉らせ給ふ。御かへりとく」と云ふに、いみじく憎み給ふを、いかなる御文ならむと思へど、只今急ぎ見るべきにあらねば、「いね今聞えむ」とて、ふところにひき入れて入りぬ。猶人の物いふ聞きなどするに、すなはち立ち歸りて、「『さらば、其のありつる文を賜はりて來』となむ仰せられつる。とく〳〵」と云ふに、あやしくいせの物語なるやとて見れ

六 主殿司
七 清少の心也
八 女房達清少のほとりへあつまりし也
九 外より何の誰と名のりて、清少に使者のあるさま也
一〇 清少の詞也、只今こそまゐりたれ其のほどに何事のありて人のよぶぞと也
一一 清少問はする也
一二 殿上人達よりの使なれば也
一三 どのもりづかさが詞也
一四 清少のたち出でて也
一五 此文齊信のまゐらせ給ふと主殿司のいふ也
一六 清少の詞也
一七 清少の心也
一八 主殿司又來て也

ば、青き薄様に、いと清げに書き給へるを。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省の花の時錦帳の下」と書きて、「末はいかに〳〵」とあるを、いかがはすべからむ。御前のおはしまさば御覽せさすべきを、これが末知り顔に、たど〳〵しき眞名に書きたらむも見ぐるしなど思ひまはすほどもなく、せめまどはせば、ただ其の奥に、炭櫃の消えたる炭のあるして、「草のいほりを誰か尋ねむ」と書きつけて取らせつれど、返事もいはで、

○さすがにさうざうしくこそ――頭中將のいへりし詞也。清少をにくみながらも、さすがに清少とかたらはねばさびしきに、物いひやらんと齊信のの給ふとある人清少に告げし也。

○よにあらじ――頭中將は我をうとみはて給へば、物いひおこせ給ふ事はあらじとの心也。

○ひとひしもにくらし――その日一日清少の局に居暮して、夜に入りて后宮の御かたへまゐりたれば、はや后宮は御寢ありしと也。

○よるのおとど――年中行事歌合註云、よるのおとどと申すは、天子の御寢所なり。劍璽をおかるゝ故にいつも灯をけたず。是をかいともしと申すにやとぞ云々。猶禁祕抄に委し。

○へんをぞつく――女房達簫突してある也。稱名院殿御說、簫つきとは文字の

一五早々返事給はらんと也
一六清少の詞也
一七青薄様、ただのぶ卿の文のさま也
一八思ひの外に何事にもあらぬとの心也
一九頭中將より書きおこせし文集のことば也
二〇清少のこゝろ也
二一后宮の御事也
二二句
二三女はかなをこそかけ、萬名は書きなれねば也
二四返事をいそぐ也
二五中將の文のおくに也
二六鞍の句、廬山雨夜草庵中なれば かやうにいへり

つくりと篇(ヘン)とを分ちて、つくりを隱して篇をもつて、何といふ文字といひあつる事のたとへば嫁かくのごとくなるべし。橋姫卷に、恭うちへんづきなどあり。

○人づてならで申すべき事なん——清少に直に可申事と也。

○いねいまきこえむ——主殿づかさは先づかへれ。返事はやがてこれよりせむと也。

○猶人の物いふききなど——立ち歸りて。彼のへんづきせし女房の、清少のほとりへきて物がたりするをききてあると也。

○さらば其のありつる文を賜はりてことなむ——只今返事なくば、其の文とり返して來よと、頭中將ののたまひしと也。

○いせの物がたりなるや——伊勢物語に、長岡の殿より業平へ、とみの事とて御文ありといへり。頓は急々の事なればなり。

○心ときめきしつるさまにも——頭中將さすがにさうざうしくこそあれ。物やいひにやらましとの給ひ、又とみの使をおこせて、青きうすやうに清げに書きたる文、おこせ給ふはいかなる心ばへぞ。にくみ給へる心も引きかへて、やさしきさまの事もやと、心ときめきせしに、思ひの外に何の事もなきと也。

○らんしやうの——蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中。文集十七にあり。今夜の雨に頭中將は御物忌に籠りてつれづれなるに、清少は夜の御殿の錦帳(キンチヤウ)の下に侍る事を思ひ准(ナゾラ)へて、此の上句を書きやり給ひし也。扁省は尙書省とて政を行ふ所也。廬山は樂天の山居也。

三中將の返事もなきなり

一清少などふしたる也
二御所より清少の局へ也
三源の經房、前の御遊に筆ふきし人也
四清少を尋ねらるるなり
五清少の詞也
六さやうに也
七源中將の詞也
八清少の御前へまうのぼらであるよと也
九殿上の番所也
一〇物の心をもしりし人々をいふ也

○草のいほりをたれかたづねむ——是ほどの事を誰か尋ねむとの心をいひて、我は頭中將ににくまれければ、いかで問ひ給はむとの心をそへたり。

みな寢(ネ)て、つとめていととく局(つぼね)におりたれば、源中將の聲(こゑ)して、「草の庵(いほり)やある草の庵やある」と、おどろ〳〵しう問(と)へば、「などてか、さ人げなきものはあらむ。玉の臺(うてな)もとめ給はましかば、いで聞(きこ)えてまし」と云(い)ふ。「あなうれし。しもにありけるよ。うへまで尋(タヅ)ねむとしつる物を」とて、よべありしやう、頭中將のとのゐ所にて、少し人々しきかぎり、六位まで集(あつま)りて、萬(ヨロヅ)の人のうへ、昔今(むかし)と語(かたら)りていひしついでに、「猶此のもの、むげに絶えはてて後こそ、さすがにえあらね。もしいひ出づる事もやと待てど、いさゝか何とも思(おも)ひたらず、つれなきがいとねたきを、こよひ惡(あ)しとも善(よ)しとも、定(さだ)めきりて止(や)みなむかし」とて、皆いひあはせたりし事を、「只今(いま)は見るまじき」とて、入り給ひぬ」とて、主殿司(とのもづかさ)來(き)たりしを、又追(おも)ひ返(かへ)して、「ただ袖をとらへて、東西(ひがしにし)をさせず、乞(こ)ひ取り持(も)て來ずば、文を返し取れ」といましめて、さばかり降る雨のさかりに遣(や)りたるに、いと疾(と)く歸りきたり。「これ」とてさし出でたるが、ありつる文なれば、返してけるかとうち見るにあはせてをめけ

一頭中將の詞、清少をさす也、
二無下は一向に也
三にくみながらもさすがにと也、堪忍しかたき心也
三少しも、清少のていを云ふ也
四清少のありさまの善惡をさだめむと也
五試みにかの蘭省の花の時といひやりしと也
六東西也
七主殿司のかへりし也
八青きうすやう也
九さてはもとの文を其のまゝ返したると見しと也
一〇源中將などの心也
一一草のいはりの返しなれば也

ば、『あやし。いかなる事ぞ』とて、皆寄りて見るに、『いみじきぬす人かな。猶えこそ棄つまじけれ』と見騒ぎて、『これが本附けてやらむ。源中將つけよ』などいふ。夜更くるまで附け煩ひてなむやみにし。此の事、必ず語り傳ふべき事なりとなむ定めし」と、いみじくかたはらいたきまで云ひきかせて、「御名は、今は草のいほりとなむ附けたる」とて、急ぎたち給ひぬれば、「いとわろき名の、末まであらむこそ、口をしかるべけれ」と云ふ程に、

○などてかさ人げなき物は——草の庵と名付けたるをとがめて、さやうの名は聞きいれじ。玉の臺などよばれ候はむにこそ、出であはめと也。

○よべありしやう——昨夜のありさまくはしくかたり給ふさま也。

○むげに絶えはててこそ——清少と一向に中絶しては勘忍しがたきと也。前にさうざうしくこそあれといへる首尾也。

○もしいひ出づる事もやと——彼の謎人のいひわけを、清少の方より云ひ出だすよとまてど、さもなくて、つれなくねたきとなり。前にいみじうにくみ給ふを、とかくもいはず見もいれで過ぐすとありし首尾也。

○只いまは見るまじきとて——前に只今いそぎ見るべきにあらねばと有りし事也。

○ただ袖をとらへて、とうざいをさせず——清少を東西に身ゆるぎもさせず返

一二頭中將なごいへりしにや
一三世がたりにして、はめ草にせむと也
一四是も源中將の詞也
一五前に草の庵やある〳〵といひしことわり也
一六清少のひとりごつにや

一則光の清少にいふ詞也、草の庵の事也
二清少御前にやあらむとて、是まで尋ねきしと也
三清少の詞也
四則光が詞也、いでは發語の詞也
五早く清少にいひきかせたく思ふゆゑ夜の明くるをまちしさま事とりてきたれ。さなくばその文取りかへしてまゐれと也。

○かへしてけるかとうち見るにあはせて——かの文を見ると、一度に各感じてあつとわめきしと也。

○いみじきぬす人かな——清少を只人ならずと、ほめむととてざれていへる詞也。禪話に、此老賊などいふたぐひなるべし。

○これがもとつけてやらむ——彼の下句に上句つけてやらむと也。

修理亮則光、「いみじきよろこび申しに、うへにやとて參りたりつる」と云へば、「なぞ。司召ありとも聞えぬに、何になり給へるぞ」と云へば、「いでまことに嬉しき事のよべ侍りしを、心もとなく思ひ明してなむ。かばかり面目ある事なかりきとて、はじめありける事ども、中將の語りつるおなじ事どもをいひて、『このかへりごとにしたがひて、さる物ありとだに思はじ』と、頭中將の給ひしに、ただに來りしはなか〳〵よかりき。もて來りしたびは、いかならむと胸つぶれて、まことに惡からねは、せうとのためも惡かるべしと思ひしに、なのめにだにあらず。そこらの人のほめ感じて、『せうとこそ聞け』との給ひしかば、下心にはいと嬉しけれど、『さやうのかたには、更にえさぶらふまじき身になむ侍る』と申ししかば、『ことは聞き知れとにはあらず。ただ人に語れとて聞かするぞ』との給ひしなむ、少し加へ口をしきせうとの覺に侍りしかど、『これが本つけ心見るに、いふべきやうなし。

一七頭中將などいへりしにや
一八世がたりにして、はめ草にせむと也
一九是も源中將の詞也
二〇前に草の庵やある〳〵といひしことわり也
二一清少のひとりごつにや
二二則光が詞也、いでは發語の詞也
二三早く清少にいひきかせたく思ふゆゑ夜の明くるをまちしさま

也
六返事とりて主殿司のきたりし時也
七草の庵の返事のすぐれし事也
八歌連歌は不得心なると也。則光は歌連ひと見ゆ
九又人々の詞也
一〇前源中將の此の事必ずかたりつたふべき事也といへりし首尾也
一一則光歌道不得心なれば也
一二別に返歌をやせむと人々いひしと也
一三返歌せぬにはかへりておとるべければ也
一四前につかさめしありともきこえぬにと、清少のいひしをうけ

ことに又、これが返しをやすべき」など云ひあはせ、悪き事いひては、なか〳〵ねたかるべしとて、夜中までなむおはせし。これは身の爲にも、人の爲にも、さていみじきよろこびには侍らずや。司召に少將のつかさ得て侍らむは、何とも思ふまじくなむ」と云へば、げに數多して、さる事あらむとも知らで、ねたくもありけるかな。これになむ胸つぶれて覺ゆる。此の妹兄といふ事をば、うへまで、皆しろしめし、殿上にも、つかさ名をばいはで、せうととぞつけたる。

○修理亮のりみつ――未勘、奥にかうぶりえて遠江介に任ず。行成卿よりも前に清少に通ぜし人也。

○なぞつかさめしありとも――司召は秋の京官の除目をいへり。江次第などに委し。除目に官を得し人はよろこびとて、こなたかなたに拜賀の事あり。今則光よろこび申しにまゐりたりといふに付けて、司召もきこえぬに何に昇進せしぞと也。

○このかへりごとにしたがひて――前にこよひあしともよしとも、さだめきりてやみなむとの事也。

○ただにきたりしは中々――はじめ返事なくて主殿司の歸りしは、なまじひの返事あらむよりは、かへりてよかりしとなり。

○せうとのためも――則光清少と仲よき故、人々戯に兄弟と申さるゝ事を今も

ていふ也
一五清少の心也、頭中將、源中將などいひあはせし事どもしらでさしいらへせし事の妬さと也
一六清少と則光との中の事也
一七修理亮とは則光をいはで也

云ふ也。實の兄弟にはあらず。

○せうとこそきけ――兄殿きかれよと、たはぶれの給ひし詞也。夕顔の巻に、右近のきみこそ先づ物見給へとあり。若紫の巻にも、うへこそなどある、おなじ詞也。

○ことくはへきゝしれとには――詞をくはへてつけ心みよとにはあらずと也。つけ心みよ、又此の句の面白きを、ききしれにもあらずと也。

○これがもとつけ心みるに――彼の草庵の句の上句をつけ見るに及びがたしと也。

○少將のつかさえて侍らむは何ともおもふまじく――過分の昇進せむより、清少の名譽をよろこぶとなり。懇志をいへることばなり。職原抄云、少將相當正五位下、五位殿上人中爲二諸第公達一者任レ之下略。

物語などして居たる程に、「まづ」と召したれば、參りたるに、此の事仰せられむとてなりけり。「うへの渡らせ給ひて、語り聞えさせ給ひて、をのこども、皆、扇に書きてもたる」と仰せらるるにこそ、あさましう、何のいはせける事にかと覺えしか。さて後に、袖几帳など取りのけて、思ひなほり給ふめりし。

○まづとめしたれば――清少を后宮のめす也。少々用ありともまづ〳〵まゐれと也。

○此事おぼせられむとて――草のいほりの返事の事なり。
○あさましう何のいはせ――我ながら心ならずもいひける草のいほりかなといふ心也。かく上つかたまで御沙汰を恥ぢおもへる心をいふ也。
○袖ぎちやうなどとりのけて――前に頭中將袖を顔にへだてて、清少を見おこせ給はぬ事ありし。几帳はかほかたちを隠しへだつる物なれば、袖几帳といふなり。此の事の後にはさやうに清少を見ぬやうにもせで、彼のそらごとゆゑのにくみも、頭中將の思ひなほりしと也。

一其あくるとし也
二句
三后宮職、前註
四清少留守せらるゝにや
五二十六日也
六齊信卿也
七頭中將清少に懇懇なるべし
八局の戸早くあけよと也
九梅壺に清少斗

七十二

かへる年の二月廿五日に、宮職の御曹司に出でさせ給ひし御供にまゐらで、梅壺に残り居たりし又の日、頭中將の消息とて、「きのふの夜、鞍馬へまうでたりしに、こよひ方のふたがれば、たがへになむ行く。まだ明けざらむに歸りぬべし。必ずいふべき事あり。いたく叩かせて待て」との給へりしかど、「局に一人はなどてあるぞ、こゝに寢よ」とて、御厨殿召したれば、參りぬ。久しく寢おきておりたれば、「よるいみじう人の叩かせ給ひし。辛うじて起きて侍りしかば、『うへにかたらば、かくなむ』との給ひしかども、『よもきかせ給はじ』とて、臥し侍りにき」と語る。
○梅つぼに――梅壺は凝花舎といふ御殿の名也。梅をうゑられしゆゑの名と

はいかでか居るぞ、みくしゆどのへきてねよと也
一〇定子の御いもうと也
一一御厨殿にね過ぐして我局へおりし也
一二留守せし清少の從者が詞也、頭中將のたゝきし也
一三たゝきし人の詞也、清少を清者のうへといふ也。頭中將の來しといへと也
一四清少の承引あるまじきとの心也

一是赤頭中將の消息也
二殿上より退出することなるべし

ぞ。禁祕抄云、梅壺梅、西白梅東紅梅之由、在二清少納言記一とあるも、此段の奥に見えたる事也。こゝに定子のおはすにや。
○くらまへまうで――鞍馬寺、水鏡云、延暦十六年、藤原伊勢人といふ人、貴船の明神の御をしへにてつくり奉りし也。元享釋書には、此の伊勢人の馬のとどまりし靈地なれば、鞍馬と名付けし由あれど、日本紀には、天武天皇の御馬とめ給ひし故の名と見ゆ。古よりの名なるべし。
○こよひかたのふたがれば――鞍馬より清少へ方ふたがれば、今夜は外へ方違に行きて、明朝ゆかむと也。方ふたがりとは、天一神などの方にあたりたる夜を云ふ也。其の夜は其のふたがれる方へはゆかで、ことかたにて明して、そこよりは方あしからねばゆく事也。
○みくしげどの――中關白道隆公の四君一條院の御厨殿、小一條院の母代と榮花物話の系圖にあり。拾芥云、御厨殿は内藏寮の外御服などたちぬふ所なり。
とす、女藏人あり。河海云、御厨殿は貞觀殿の中にあり、上藏の女房を別當

心もとなの事やとて聞くほどに、主殿司來て、「頭の殿の聞えさせ給ふなり。只今まかり出づるを、聞ゆべき事なむある」といへば、「見るべき事ありて、うへになむのぼり侍る。そこにて」と云ひて、局は引きもやあけ給はむと、心ときめきして煩はしければ、梅壺の東おもての半蔀あげて、「こゝに」と云へば、めでたくぞあゆ

三 清少の答也。
后宮に用事にてまゐること也
四 后宮にて承らむこと也
五 おもひさわぎたる句也
六 半蔀
七 こゝにて頭中將にま見えむこと也
八 頭中將のさま也
九 前に註す
一〇 光の字也
一一 清ら也
一二 前に註す
一三 指貫のうはもんにや
一四 折紙
一五 直衣の下の御衣（オンゾ）の色也
一六 次第也。下にかさなりたる色也
一七 むかしの人もの

み出て給へる。櫻の直衣いみじく花ばなと、うらの色つやなど、えもいはずけうらなるに、葡萄染のいと濃き指貫に、藤のをり枝、ことごとしく織りみだりて、紅の色、打目など、かがやくばかりぞ見ゆる。次第に白き薄色など、あまた重なりたる。せばきまゝに、片つ方はしもながら、すこし簾のもと近く寄り居給へるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、是にこそはと見えたる。御前の梅は、西は白く、東は紅梅にて、少し落ちがたになりたれど、猶をかしきに、うらうらと日のけしきのどかにて、人に見せまほし。簾のうちに、まして若やかなる女房などの、髪うるはしく長く、こぼれかゝりなどそひ居ためる、今すこし見所あり、をかしかりぬべきに、いとさだ過ぎ、ふるぶるしき人の、髪なども我にはあらねばや、處々わなゝき散りぼひて、大かた色ことなる頃なれば、あるかなきかなる薄鈍ども、あはひも見えぬ衣どもなどあれば、露のはえも見えぬに、おはしまさねば、裳も著ず、袿姿にて居たるこそ、物ぞこなひに口をしけれ。「職へなむ參る。」言づけやある。いつかまゐる」などの給ふ。「さてもよべ、あかしもはてで、されどもかねてさいひてしかば、待つらむとて、月のいみじうあかきに、西の京よりくるまゝに、局を叩きしほど、辛うじて寢おびれて起き出でたりしけしき、いらへはしたなさ」など語りて、笑ひ給ふ。「むげにこそ思ひうむじにしか。などさるものをばおきたる」など、げにさぞありけむと、いとほしくもをかしくもあり。しば

かやうならむこと見ゆること也
一五 散りがたに也
一六 禁秘抄にいへるは是也
一七 髪のうつくしき也
一八 是より清少のみづからのさまをいふ也
一九 髪のちりぢりとそゝけたるさま也
二〇 色のうすき心也
二一 かさなりたる色々もなき心也
二二 光（ハエ）榮同
二三 后宮は職の御曹司におはして梅壺におはさぬ也
二四 興ざましなること也
二五 頭中將の詞也、后宮へまゐること也
二六 清少御事付け

しありて出て給ひぬ。外より見む人はをかしう、内にいかなる人のあらむと思ひぬべし。奥の方より見出だされたらむうしろこそ、外にさる人やともえ思ふまじけれ。

○はじとみあげて——花鳥餘情云、半蔀は下は格子はた板などをうちて、うへに蔀を釣りて外へ上るやうにしたるをいふ。車にも半蔀とてあり。上のしとみ斗をあげたれば半蔀とは名づけたる也。

○せばきまゝにかたつかたは下ながら——緣などのせばき所なれば、腰などかけたるやうに、半身は下ざまにて、簾のもとの長押などによりゐ給ふ也。

○ゐにかき物がたりのめでたき——おくにてうつぼ物語の仲忠の大將の事につけて、此の頭中將の事をいひ出づる事あり。それをかゝむとて、先づこゝにかやうにいふなるべし。

○すのうちにまして——かやうの折ふしは、只にも人に見せまほしく美麗なるに、まして簾中に若き女房の髪うるはしきなどあらば、猶今すこし見所あるべきに、我が居て無興と也。

○さだすぎふるぶるしき——央過。源氏におほき詞也。年齢のなかばに過ぎて古めかしき事也。

○かみなども我にはあらねばにや——上に若き女房の髪うるはしき事をいひし

申さぬかと也
三いつ頃職へはまゐるぞと也
三是も頭中將の詞也
三句
三いたくたゝかせでまてとの給ひし事也
三最前清少の局なたゝかれし事也
三清少の局の留守の從者がさま也
三體の字也。うらみいきぞほる心也
三清少の心也。尤もうむじ給ひけむと也
三頭中將のかへり給なり
三外也
四喪が髪のつき也
四外にさやうの頭中將のやうな

に對して、我身にはさやうのうるはしさはなきにやと也。

○大かた色ことなる頃——輕服などの時節にや。鈍いろを着用也。

○ももきずうちぎすがた——袞は宮仕へ人の着する物なれど、后宮おはさねば清少袞を着ずして、袴ばかり着たるさま也。

○さてもよべあかしもはてで——かの方違所より未明に歸りて、清少の局へ戸たゝきよりし事を語り出だし給ふ也。

○西の京よりくるまゝに——彼の方違所なるべし。西京に、野寺町、細井小路宇多小路、木辻など其の小路の名、拾芥に委し。

○いらへのはしたなさ——從者が答の事也。前にかくなむとの給ひしかども、よもきかせ給はじといひし事なり。

○などさるものをばおきたる——いかでかく、はしたなき從者を留守にはおきしぞなど中將の給ふ也。

○とより見む人はをかしう——外より見ては、此の頭中將の花やかなる形にてかたらひ給へば、内の人ゆかしからむと也。

○おくのかたより見出され——奥より見出さば、清少の形あしければ、外に頭中將のやうなる人やあらむともおもふまじきと也。

暮れぬれば參りぬ。御前に、人々おほくつどひ居て、物語のよきあしき、にくき所

る人やあらむとも思はじと也
四句
一后宮職へまゐりしと也
二古物語草紙也
三いひかはす事也
四誦じ也
五伸忠也
六后宮も也
七人々清少にいふ詞也、此の草紙の善惡を申せと也
八深切に也
九清少の詞何かはよからむと也
一〇あまりの事にて云ふことは也
一一人々の心也
一二人々の詞也
一三后宮の御こゝぼ也
一四頭中將の事也
一五清少の見たらぼと也

などをぞ定めいひしろひ、ずうじ、仲忠がことなど、御前にも、おとりまさりたる事など仰せらるれける。「まづこれはいかに、とことわれ。仲忠が童おひのあやしさを、せちに仰せらるゝぞ」などいへば、「何かは、琴なども、天人おるばかり彈きて、いとわろき人也。みかどの御むすめやは得たる」と云へば、「仲忠がかた人と心を得て」。「さればよ」など云ふに、「此の事どもよりは、ひる齊信か參りたりつるを見ましかば、いかにめで惑はましとこそ覺ゆれ」と仰せらるゝに、人々、「さてまことに、常よりもあらまほしう」などいふ。「まづその事こそ啓せむと思ひて、まゐり侍りつるに、物語の事にまぎれて」とて、ありつる事を語り聞えさすれば、「誰も〳〵見つれど、いとかく縫ひたる絲、針目までやは見とはしつる」とて笑ふ。「『西の京といふ所の荒れたりつる事、もろ共に見る人あらましかばとなむ覺えつる。垣なども皆やぶれて、苔生ひて』など語りつれば、宰相の君の、『かはらの松はありつや』といらへたりつるを、いみじうめでて、『西の方都門を去れること、いくばくの地ぞ』と口ずさびにしつる事」など、かしがましきまでいひしこそ、をかしかりしか。

○なかただがことなど——うつぼ物語に、仲忠の大將とて、わかこ君といひし人の子にて、うつぼの俊蔭がむすめの腹に生まれし人。をさなくて母に孝有りて、さまざまの奇特あり。琴をよくひきて、帝の一の内親王を北方に賜ふべき

宜旨下りし事などあり。

○わらはおひの――童生也、伸忠はわらはの生立より奇特有りし物ぞと、深切に后宮にも仰せらるるぞやと清少にいふ也。伸忠に贔負の人々の詞也。

○きんなどもて人おるばかり――伸忠が琴ひきて、夏の空に雪をふらし、御殿のかはらをおとせし事など、うつぼ物語に見ゆ。其の外琴をひきて天人の感じくだりし事、信の大臣、清見原の天皇などの事どもあれば也。

○なかただがかたうどと思ひて――いとわろき人とはいへど、琴をひきし事などいふは、下心は清少も伸忠が方人と人々思ひて、さればよと云ふ也。實は清少は頭中將をほむる下心ありて、伸忠をわろき人といひしなるべし。

○ひるただのぶがまゐりたりし――前に職にまゐると頭中將の給ひし。此の詞にて、まことにまゐられし事見えたり。

○西の京のあれ――是頭中將の西京にかたゝがへにゆきしゆゑ、后宮の御かたにてかたられし也。

○かはらの松はありつや――西の京のあれて、垣やぶれ苔生ひし事をかたるにつけて、唐の驪山宮の長安の都の西にて荒れし事、文集の樂府にあるを思ひよそへて問へる詞也。

白氏文集四樂府云、驪山高、高々驪山上有レ宮、朱樓紫殿三四重、遲々兮春日、玉甃暖兮温泉滌、嫋々兮秋風、山蟬鳴兮宮樹紅、翠華不レ來歲月久、「牆有レ衣兮瓦有レ松、吾君在レ位已五載、何不二一幸一乎其中一、西去二都門一幾多地下略。」

一清少の里卒へ退出して也
二清少の心にこめ忍びたるあやまらなれはと也
三日頃したしき人にて也
四春宮に親しき故の見まひには あらで、懸想人もくるゝ也
五あまりに親疎の見まひもむつかしけれはと也
六前に修理亮とありし同人也、後官にや
七則光が詞也
八齊信卿の事也

七十三

里にまかでたるに、殿上人などの來るも安からずぞ、人々いひなすなる。いとあまり、心に引き入りたる覺ほえたなければ、さいはむ人もにくからず。又、よるも晝も、來る人をば、何かは、「なし」なども、かがやきかへさむ。まことに睦まじくなどあらぬも、さこそは來めれ。餘うるさくもげにあれば、此の度出でたる所をば、いづくともなべてには知らせず。經房、濟政の君などばかりぞ知り給へる。左衞門の尉則光が來て、物語などするついでに、「昨日も宰相の中將殿の、『妹のありし所、さりとも知らぬやうあらじ』と、いみじう問ひ給ひしに、更に知らぬよし申しこそありけれ。ほと〳〵笑みぬべかりしに、左中將の、いとつれなく、知らず顏にて居給へりしを、かの君に見だにあはせば、笑みぬべかりしにわびて、臺盤の上に、あやしき布のありしを、只とりに取りて、食ひまぎらはししかば、中間にあやしの食物やと、人も見けむかし。されど、かしこう、それにてなむ申さずなりに

九 清少の里亭を則光しらむと也
一〇 いかにかくすともとの心也
一一 わりなく清少の里をしひて問ひ給ふ也
一二 知りてある事をなしとあらがふ也
一三 ほとむと也
一四 經房の事也、殿上にての事と見ゆ
一五 經房に目を見合せたらば心知るどちにてなかしからむと也
一六 和布也
一七 中間也、物くふべき折にもあらでくふをいふ也
一八 和布をくふにまぎらはしてと也
一九 不用也
二〇 齊信卿の眞管

し。笑ひなましかばふえうぞかし。まことに知らぬなめりと覺したりしも、をかしうこそ」など語れば、「更にな聞え給ひそ」など、いとど云ひて、日頃久しくなりぬ。

○殿上人などのくるもやすからずぞ、人々いひなすなる——清少に戯想の人ならねど、人々はとかく名を立つると也。

○さいはむ人もにくからず——さやうに名たてがましくいひなす人も、にくからぬと也。心にあやまりあらばこそ、おそれにくまめ、實なき事はなにともおぼえぬ心也。

○何かはなしなども、かがやきかへさむ——つねに親しく來る人を、いかで恥ぢがほに、「清少はこゝになし」などいひて、ただには歸すべきぞと也。かがやくことは夕顏の卷に、「恥ぢかがやかむよりは」とある詞也、かがはゆがりるべし。

恥づるこゝろなるべし。

○つねふさ、なりまさ——經房、濟政は、彼の佛名の翌日の上の御局の御遊に、琴笛の役者にて、清少に心よせことなる人々也。

○つれなくしらずがほにて——かの頭中將の問ひ給ふかたはらに、源中將經房のおはしてつれなくしらぬ人に成りてゐ給へりしと也。經房と濟政は里亭をし給へれば也。

一 清少の心也
二 則光此の時藏人なれば、瀧口を使におこせしなり
三 文言也
四 結願也、御讀經のはての日也
五 たゞのぶ卿也
六 御讀經のための潔齊をいふなるべし
七 清少の事也
八 今はかくさむすぢなしと也
九 如何おぼす、清に則光はしらぬと思ひ給ひしと也
一〇 清少の詞也
一一 ないひきかせ給ひそと也

○だいばんのうへに——臺盤也、殿上人の日給をおこなふ盤なり。委しく前に註す。

○わらひなましかば、ふえうぞかし——しらずとあらがひながら笑ひたらば、ただのぶにさとられて、清少の有り所をかくすてだて不用にあらむと也。

○さらになきこえ給ひそ、などいとどいひて——此の詞にて、かねても則光に、我が有り所を齊信にいひきかせそ、といひおきし事しられたり。

夜いたく更けて、門おどろ〳〵しく敲けば、何のかく、心もとなく遠からぬ程を敲くらむと聞きて、問はすれば瀧口なりけり。左衞門の文とて、文をもて來たり。皆寢たるに、火近く取りよせて見れば、「明日御讀經の結願にて、宰相中將の御物忌に籠り給へるに、『妹の有り所申せ』と責めらるゝに、すぢなし。更にえ隱し申すまじき。そことや聞かせ奉るべき、いかに、仰せに隨はむ」とぞいひたる。返事も書かで、布を一寸ばかり、紙に包みてやりつ。さて後に來て、「一夜せめて問はれて、すずろなる所に率てありき奉りて、まめやかにさいなむに、いと辛し。さてとかくも御返りのなくて、そぞろなる布のはしを包みて給へりしかば、『取りたがへたるにや』と云ふに、あやしのたがへ物や、人のもとに、さる物包みて贈る人やはある、いさゝかも心得ざりけると見るがにくければ、物も云はで、硯のある紙の端

少の返事次第にしたがはむと也
一〇和布
二清少のもとに則光の来ていふ詞也、イせめたてられて
三ひきゐてありきしと也
一二イニし
一四辛也、めいわくの心也
一五和布
一六彼のめくはす心をしらで、返事をとりたがへたると則光のいふ也
一七清少の心也
一八清少のうた也
一九のりみつが詞也
二〇彼の歌書きし紙を、清少のかたへあふぎかへしてにゆたる也

に、

かづきする海士のすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけむ

と書きて出したれば、「歌詠ませ給ひつるか。更に見侍らじ」とて、あふぎ返して逃げていぬ。

○何のかく、こゝろもとなくとほからぬほどをたゝくらむ——奥深き家の門を、誰きくまじきとて、かやうには何者のたゝくぞとなり。

○左衛門の文とて——則光の文也。イ本左衛門のかみとてとあり。前に左衛門尉とあり。奥に巡爵の事あれば、督といふ本あやまりなるべし。

○みどきやう——河海云、本朝月令二月云々。季御讀經とは春秋内裏にて、大磐若を講讀せらるゝなり。引茶とて僧に茶をひかるゝ也。雲圖抄云、初日被レ仰二度者一、第二日引茶秋無レ之、番論義秋無レ之、第三日御論義下略圖あり。御裝束など延喜式圖書に委し。江次第にもあり。

○めを一寸ばかりかみにつゝみて——前に則光和布を食ひたるとかたりし故、今も和布をやりて目くはするといふ心也、必ず我が有り所を語り給ひそと、めくはする心也。奥の歌にて其の心見えたり。

○一夜せめてとはれて、すずろなる——頭中將にあまりに清少の在り所を問はれて、我もしらぬさまして、そぞろなる所へ中將をつれありきしと也。

一たがひに也、則光と清少の中の事也
二のりみつより清少へ也
三餘所ながらも我をそれぞともを見給へ忘れ給ふなとなり
四よのつねにのりみつがいひし

○まめやかにさいなむに、いとからし——中將の眞實に我をせめうらみ給ひて迷惑と也。

○人のもとにさる物つゝみて——只に心もなくて和布をやる物かはと也。只にはさやうの物を人にやる事はなき事なれば、取りたがへむやうもなき物をとの心也。

○かづきするあまの——歌、海士のすなどりするをかづきと云ふ也。歌の心は、かの和布をつかはせしは、我が在り所をそこと、ゆめ〳〵いふなとの目くはせならむと也。此のとまりめをくはせけりなど、いひつめざる所優美に心ふくみて面白きにや。此の歌後拾遺集に入りし詞書に、陸奥守則光藏人にて侍りける時などあり。此の草紙と同じ心なれば略之。

かうかたみにうしろ見かたらひなどする中に、何事ともなく、少し中あしくなりたる頃文おこせたり。「びんなき事侍るとも、ちぎり聞えし事はすて給はで、よそにても、さぞなどは見給へ」と云ひたり。常に云ふ事は、「おのれをおぼさむ人は、歌など詠みて得ぎすまじき。すべて、仇敵となむ思ふべき。今は限ありて、絶えなむと思はむ時、さる事はいへ」と云ひしかば、此の返しに、

くづれよる妹背の山の中なればさらによし野の川とだに見じ

と云ひ遣りたりしも、まことに見ずやなりにけむ。返事もせず。さてかうぶり得て

五 歌を我に給はるなと也
六 うたよみて給はらは猥敵とおもはむと也
七 うたよむ事をいふ也
八 かの則光の文の返事に也
九 清少のうた也
一〇 則光錢爵せし也
一一 遠江介也、鑑爵ののち受領せしなるべし

とほたあふみの介などいひしかば、憎くくしてこそやみにしか。

○びんなき事侍るとも――たとひ便なく、うらめしとおほす事有りともと也。

○いまはかぎりありてたえなむとおもはむ時――今は限りとかぎる心有りて、中絶えむと思ひ給はば歌よみ給へと也。

○くづれよるいもせの――歌、彼の則光が文に、よそにてもさぞなどは見給へといふをうけて、妹背の中もやう〳〵くづれたれば、吉野川とも其の人とも、そなたにも見給ふまじきと也。古今、「流れては妹背の山の中に落つるよしの川のよしや世の中」妹の山背の山とてあるを、彼のせうといもうとなど、人々のいひたるにとりあはせてよめり。

七十四

物のあはれ知らせ顔なるもの　鼻垂るまもなくかみてものいふ聲。眉抜く。

○はなたるまもなくかみて――源氏に、鳴くことをはなかむといへり。さまでたらぬはなをたび〳〵かみて、なくけしきするは、人に哀をしらせ顔なるとも也。

七十五

一 是より后宮の清少をめしまつはす物がたり也
二 后宮より清少を召さるゝ御文のはしに也、はし書の心也
三 左衛門陣の朝朗をはじめ、かかる禁中の御有様をいかでふり捨て、里住はするぞとの心也
四 又朝朗もめでたからで、清少は里ずみするかと也
五 畏也、里住して宮仕を怠る恐れを申す也
六 うたひ物などの詞にや
七 后宮よりの御詞也
八 面目なき事也、彼のうたひ物などにあることはにや

さて、その左衛門の陣に行きて後、里に出ててしばしあるに、「とく参れ」など仰言のはしに、「左衛門の陣へ行きし朝ぼらけなむ、常におぼし出でらるる。いかでさつれなく、うちふりてありしならむ。いみじくめでたからむとこそ思ひたりしか」など仰せられたる御返事に、かしこまりの由申して、私には、「いかでかめでたしと思ひ侍らざらむ。御前にも、さりとも、『中なるをとめ』とはおぼしめし御覧じけむとなむ思ひ給へし」と聞えさせたれば、立ち歸り、『いみじく思ふべかめるなり。たがおもてぶせなる事をば、いかでか啓したるぞ。只今宵のうちに、よろづの事をすてて参られよ。さらずば、いみじく憎ませ給はむ』となむ、仰言ある」とあれば、「よろしからむにてだにゆゝし。まして『いみじく』とある文字には、命もさながら棄てしなむ」とて参りにき。

○さてその左衛門の陣に――前の有りがたき物といふ奥に、「有明のいみじう霧渡りたる庭などに、おりてありくを聞し召して、お前にもおきさせ給へり。上なる人は皆おりなどして、漸々あけもてゆく。左衛門陣まかりて見むとてゆけば」とあり。その所を今いひ出でて、其の後清少の里へいでし事をいふなるべし。○さるもんのぢんへいきし弱則――是も彼の所の事を、后宮の仰せられし事也。其の所の詞に、おまへにもおきさせ給へりとある首尾也。其の時の事おぼし忘れぬとの心也。

九 清少にまうのほれと也
一〇 后宮の御せを女房のかたより云ふ也
一一 清少の心也
一二 文字也、文の詞を云ふ也
一三 いのちの大事をも捨てまゐらむとてと也

○わたくしには――后宮さへ思し召し出す朝朗を、清少が私にはいかでめで侍らざらむと也。

○いみじくおもふべかめるなり――清少の里居を誠によろしからず思し召すと也。かの清少の長りの由を申せしに、答へ給ふ詞也。にくく思し召すにはあらで、清少を召しよせむとての事也。

○たがおもてぶせなる――其の難し参程の面目なき事を、誰何にかけてはいひしぞと也。

○よろしからむにてだに――大かたに、にくませ給はむとあるにてだに、ゆゝしくいまはしきに、ましてい、みじくにくませ給はむとある詞をききてはと也。

七十六

職の御曹司におはします頃、西の廂に、不斷の御讀經あるに、佛など懸け奉り、法師の居たるこそ更なる事なれ。二日ばかりありて、緣のもとにあやしき者の聲にて、「猶その佛供のおろし侍りなむ」と云へば、「いかでまだきには」といらふるを、何のいふにかあらむと、立ち出でて見れば、老いたる女の法師の、いみじく煤けたる狩袴の、筒とかやの樣に細く短きを、帶より下五寸ばかりなる、衣とかやいふべ

一 いふも今更めきて、たふとき事と也
二 清少まうのぼりて二日めほど也
三 乞食也
四 法師などの詞

からむ、同じ樣に煤けたるを着て、猿の樣にて云ふなりけり。「あれは何事いふぞ」と云へば、聲ひき結ひて、「佛の御弟子にさぶらへば、佛のおろしたべと申すを、此の御坊達のをしみ給ふ」と云ふ。花やかにみやびかなり。かゝる者は、うちくむじたるこそあはれなれ、うたても花やかなるかなとて、「こと物は食はで、佛の御おろしをのみ食ふか。いと尊き事かな」と云ふけしきを見て、「などかこと物も食べざらむ。それがさぶらはねばこそ、取り申し侍れ」と云へば、くだ物、ひろきもちひなどを、物に取り入れて取らせたるに、むげに伸よくなりて、よろづの事をかたる。若き人々出で來て、「男やある」、「いづこにか住む」など、日々に問ふに、をかしき事、そへ言などすれば、「歌はうたふや。舞などするか」と問ひもはてぬに、「よるは誰と寢む、常陸の介と寢む。寢たる肌もよし。」これが末いと多かり。

又、「男山の峯の紅葉は、さぞ名はたつ〳〵」と、頭をまろがし振る。いみじくにくければ、笑ひにくみて、「いね〳〵」と云ふもいとをかし。「これに、何取らせむ」と云ふを聞かせ給ひて、耳をふたぎてありつれ。その衣一つ取らせて、とくやりてよ」と、えこそ聞かで、仰言あれば、取りて、「それ賜はらするぞ。衣煤けたり。白くて着よ」とて、投げ取らせたれば、伏し拜みて、肩にぞうちかけて舞ふものか。誠ににくくて皆入りにし。後にはならひたるにや。常に見えしらがひてありく。やがて常陸の介とつけた

一〇 清少の心也
一一 竹の筒のやうに細く短き也
一二 衣のすそみじかき也
一三 かりはかまはどすゝけたる也
一四 猿のやう也、かの乞食のさま也
一五 清少の詞也
一六 乞食の答ふるさま也
一七 其のいふこゑのはなやかなる也
一八 扉の字也
一九 清少の詞
二〇 尼が詞
二一 菓子也
二二 今のものしもちといふ物の類にや
二三 よくなつきたる心也
二四 尼がうたふ也
二五 此のうたのすにや
二六 清少の心也

り。衣もしろめず、同じ煤けにてあれば、いづちやりにけむなどにくむに、右近の内侍の參りたるに、「かゝる者なむ語ひつけて置きためる。かうして常に來ること」と、有りしやうなど、小兵衛といふ人して、まねばせて聞かせ給へば、「あれいかで見侍らむ。必ず見せさせ給へ。御得意なり。更によも語らひ取らじ」など笑ふ。其の後又、尼なるかたはの、いとあてやかなるが出で來たるを、又、呼び出て物など問ふに、これはづかしげに思ひてあはれなれば、衣一つ賜はせたるを、伏し拜むはされどよし。扨てうち泣き喜びて出でぬるを、はや此の常陸の介、行きあひて見てけり。其の後いと久しく見えねど、誰かは思ひ出でむ。

○ふだんの御どきやう——中宮には春秋に季の御讀經あれど、こゝは別に不斷に御祈禱のため、おこなはせ給ふなるべし。

○猶その佛供の——はじめより物をこひたるが、法師などの、しばしまてといへど、猶佛供のおろしを賜はらむといふ也。

○いかでまだきには——速也、佛供のおろしも、いまだあるべき時節ならぬには、いかでかあらむと答ふる也。

○かりばかま——金葉集連歌に、かりばかまをば、をしとおもふかとあり。

○佛の御弟子にさぶらへば——彼の老尼の乞食のみづからいふ也。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を四部の弟子といふ也。

長かりしと也
是も尼がいふ事也
后宮のきこしめして也
はやくいなせよと也
尼がきぬを取りて也
助字也
今日に書ひて又此の尼が來たる也
前の翁丸が所にも此の人あり
かやう〳〵にてと也
其の有樣を也
袈裟の尼のまねをさせて也
右近内侍がことゝ也
是は又こと尼也
ひたちが花やかなるこゝは、かなりたる也

又后宮のきぬを騙へる也

○此の御そうたちのをしみ給ふ——前に、いかでまだきにはと、法師どものいひし事也。

○うちくむじたる——源氏物語に所々ある詞也。屈の字也。又蕉の心ある所もあり。こゝはうち埋れて、花々しからぬ心なれば屈也。

○それがさぶらはねばこそ、とり申し侍れ——こと食物なき故こそ、佛供をたべとは、機嫌をとり申し上げたれと也。

○をかしき事、そへごと——かたはらいたき事、又とはずがたりに語りそへなどすると也。

○よるはたれとねむ——尼がうたふ歌也。

○などかくかたはらいたき事はせさせつる——何とてかやうのうたを、うたはせしぞと也。后宮の仰せ事也。

○常陸の介とつけたり——彼のうたひし詞につけて、尼が名につけたる也。

○いづちやりにけむ——后宮のとらさせ給ひしきぬは、いづくへやりしやらむと也。

○小兵衛といふ人——后宮の御かたの若き女房也、奥に五せちの時あかひものとけしも此の人也。

○あれいかで見侍らむ——かれをいかでか見給はむと也。

○御とくいななり、さらによもかたらひとらじ――其の尼は、后宮の御得意成りけり。此の方に見せさせ給ふとも、此の方へはかたらひとり侍らじと、内侍のざれていへる詞也。

○ふしをがむはされどよし――かたはなる尼なれど、其のさまはよかりしと也。

○其ののちいと久しく――常陸のすけかのかたはの尼に、物かづけさせ給ふを見て、ふすべ心にて久しくまいらざるなるべし。をこがましき事をいはむとて也。

さて、しはすの十餘日の程に、雪いと高う降りたるを、女房どもなどして、物の蓋に入れつゝ、いと多くおくを、「おなじくは、庭にまことの山を作らせ侍らむ」とて、侍召して、「仰言にて」と云へば、集まりて作るに、主殿司の人にて、御きよめに參りたるなども、皆よりて、いと高く作りなす。宮づかさなど參り集まりて、言加へことに作れば、所の衆三四人參りたる。主殿司の人も、二十人ばかりになりにけり。里なる侍召しにつかはしなどす。「今日此の山作る人には、祿賜はすべし。雪山に參らざらむ人には、同じからずとどめむ」など云へば、聞き付けたるは惑ひ參るもあり。里遠きはえ告げやらず。作りはてつれば、宮づかさ召して、絹二ゆひとらせて、祿に投げ出づるを、一つづつ取りに寄りて、拜がみつつ腰にさして、皆

一 苔也
二 山などのやうにつみおきしにや
三 清少などの申し上げたるにや
四 雪山作る也
五 下つかさども也
六 事どもいひつくるなり
七 里なる侍ども也
八 雪山つくりし者どもへの祿也

九 祿也
一〇 退出也
一一 雪山の番に狩衣にて居る也
一二 此の雪山いつまで消えざらむと、狩衣の人々に問ふ也
一三 いづれも十日あまりのおとさきを答へ申す也
一四 清少に后宮の間ひ給ふ也
一五 后宮也
一六 清少が心也、十二月十餘日より正月十五日まで卅日ばかり也
一七 かろがろしくあらためじと也

まかでぬ。袍など着たるは、かたへさらで、狩衣にてぞある。「これいつまであるべきなむ」と、人々の給はするに、「十餘日はありなむ」など、ただ此の頃の程を、ある限申せば、「いかに」と問はせ給へば、「正月の十五日までさぶらひなむ」と申すを、御前にも、えさはあらじとおぼすめり。女房などはすべて、「年の内、つごもりまでもあらじ」とのみ申すに、餘り遠くも申してけるかな、げにえしもさはあらざらむ、朔日などぞ申すべかりけると、下には思へど、さはれさまでなくといひ初めてむ事はとて、かたうあらがひつ。

○おほせ事にて――后宮の仰せといふにて、侍めして山作れと云ふ也。

○御きよめにまゐり――主殿寮は、御殿の酒掃をつとむる官人也。拾遺に、「とのもりのとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな。」

○宮づかさなど――皇后宮職の大夫、亮、大進、少進、屬などを皆宮づかさといふ也。

○所のしう――藏人所衆とて廿人あり。六位の侍可レ然輩補レ之と職原抄にあり。禁祕抄にも委し。又禁祕抄、雪山の所の略云、所衆作レ山、瀧口上﨟三人、所衆三人立レ庭奉行、持二柄振一云々。これは禁庭の事ながら、后宮の雪山つくるもなぞらへてしるべし。

○おなじからずとどめむ――雪山作りたる人とは同じからずして、祿をとどめ

一十二月廿日也　二長也、雪山の高さは少しおとる也　三忠隆をおかむためなり　四忠隆が詞　五壺前栽などいふとおなじ　六清少の詞　七忠隆が歌を感ずるさま也　八たゞたかが詞也　九助字也、此の歌をかたらむと也、立つべきしてつかはすまじきと也。

○こしにさして皆まかでぬ――巻絹なれば腰にさす也。源氏物語に、こしざしとある是なり。

○うへのきぬなどきたるは、かたへさらで、かり衣にて――祿賜はりて、人々退出してのち、袍きたる人の、かつ殘り居たるは、狩衣に着かへて候ふなるべし。かたへさらでとは、源氏物語に、かたへはのこりてとあるたぐひ也。少少殘りゐる心也。

二十日の程に、雨など降れど、消ゆべくもなし。たけぞ少し劣りもてゆく、「白山の観音、これ消やさせ給ふな」と祈るも物ぐるほし。さてその山作りたる日、式部の丞忠隆、御使にて參りたれば、しとねさし出だし、物などいふに、「今日の雪山作らせ給はぬ所なむなき。御前の壺にも作らせ給へり。春宮、弘徽殿にも作らせ給へり、京極殿にも作らせ給へり」など云へば、

こゝにのみめづらしと見る雪の山所々に降りにけるかな

と傍なる人していはすれば、度々かたぶきて、「返しはえ仕うまつりけがさじ。あざれたり、御簾の前にて、人々を語り侍らむ」とてたちにき。歌はいみじく好むと聞きしに、あやし。御前にきこしめして、「いみじくよくとぞ思ひつらむ」とぞの給はする。晦がたに、少し小くなるやうなれど、猶いと高くてあるに、壺つかほにいふ也　一〇忠隆歌をすゞとききしと也　二一后宮也　二二十二月晦日也　二三是又かの雪山の事也　二四筱の乞食の尼也　二五尼が詞也、何かのたまふと也　二六歌は言を氷くすといへる心也　二七常陸介がうた也　二八嫉妬の心をにくむ也　二九常陸のすけ手をうしなひて也　三〇か、りありく也　三一返事の詞也　三二手をうしなひて雪山にかゝづらひしはあはれなると也　三三雪山也　三四きえやらで也

た、縁に人々出て居などしたるに、常陸の介出で來たり。「なといと久しく見えざりつる」と云へば、「なにか。いと心憂き事の侍りしかば」と云ふに、いかに、何事ぞ」と問ふに、「猶かく思ひ侍りしなり」とて、長やかに詠み出づ。

「うらやまし足も引かれずわたつうみのいかなるあまに物賜ふらむ

となむ思ひ侍りし」と云ふを、にくみ笑ひて、人の目も見入れねば、雪の山に登り、かゝづらひありきていぬる後に、右近の内侍に、「かくなむ」と云ひやりたれば、「などか人添へて、こゝには賜はせざりし。彼がはしたなくて、雪の山までかゝり傳ひけむこそ、いとかなしけれ」とあるを、又笑ふ。雪山はつれなくて、年もかへりぬ。

○しら山のくわんおん――加賀の白山は、いつも雪消えぬ所なれば、念じたるにや。古今「消え果つる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける。」

白山明神は延喜式神名帳には、加賀國石川郡比咩神とあるを、泰澄法師には十一面觀音とま見え給へり。其の本地を、しら山の觀音といへるなるべし。

○式部のぞうただたか――前の翁丸をうちたる藏人忠隆同人なるべし、寛弘元年正月式部丞に任ずる由、勘物にあり。

○御前のつぼにも――一條院の御前也。禁祕抄雪山の所に云、事始大略一條院御時以後也。清少納言記有二其子細一云々。この所の事なるべし。

○春宮――三條院也、冷泉院第二皇子、寛和二年七月十六日春宮に立たせ給へり。

○弘徽殿――義子也。榮花物語系圖云、義子一條院弘徽殿女御、閑院太政大臣公季公女。

○京極殿――道長公なるべし。拾芥云、京極殿土御門南、京極西、南北二町、其南一町被入道長家。

○こゝにのみめづらしと――歌、此の后宮の御方にのみと思ひしに、さやうにあまた所にもふれわたりしよとの心を、雪のふるにそへたる歌也。

○あざれたり――左禮の義也、これにかくて侍る事實義ならずと、卑下の詞也。返歌えせねば退出せむとていへるなるべし。

○いみじくよくとぞ思ひつらむ――至りてよく返歌せむ、さなくば一向すまじきと、忠隆がおもひつらむと也。

○いと心うき事の侍りしかば――彼のかたはの尼に、衣とらせ給ふが、心うさにうらみてまいらざりしと也。

○うらやましあしもひかれず――足もえひかぬほど、物とらせ給ふといふに、尼が足ひく事をいふ也。

○かくなむといひやり――かやう〳〵にて目も見いれず、ひたちのすけをいな

一 淸少の心
二 后宮の御詞也後にふりし雪はあぢきなしと也
三 是より、又齋院より御使有りし物がたり也
四 齋院の御使也
五 柚葉にやうすき直衣なるべし
六 文也
七 さむゆなるさま也
八 淸少の心也
九 また后宮御寢なりし也
一〇 母屋也、又本屋也
一一 御格子あげむ也
一二 おしなべての心也
一三 后宮御目覺し

せたると也。

○などか人そへて、こゝにはたまはせざりし――其のひたちの介に人そへて、右近がもとへもおこせ給はれかしとの心也。

朔日の日又雪多く降りたるを、「嬉くも降り積みたるかなと思ふに、「これはあひなし。はじめのをばおきて、今のをばかき棄てよ」と仰せらる。上にて、局へいと疾うおるれば、侍の長なるもの、柚の葉の如くなる宿居衣の袖の上に、青き紙の松につけたるをおきて、わなゝき出でたり。「そはいづこのぞ」と問へば、「齋院より」と云ふに、ふとめでたく覺えて、取りて參りぬ。まだおほとのごもりたれば、母屋にあたりたる御格子おこなはむなど、かき寄せて、一人念じてあぐる、いと重し。片つ方なればひしめくに、おどろかせ給ひて、「などさはする」との給はすれば、「齋院より御文の候はむには、いかでか急ぎあげ侍らざらむ」と申すに、「げにいと疾かりけり」とて、起きさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに、頭包みなどして、山橘、日蔭、山菅などうつくしげに飾りて、御文はなし。ただなるやうあらむやはとて御覽ずれば、卯槌の頭包みたる小き紙に、

山とよむ斧の響を尋ぬれば祝の杖の音にぞありける

御返し書かせ給ふ程も、いとめでたし。齋院には、これより聞えさせ給ふ。御返し

也
一四いかでさやうには急ぎひしめくぞと也
一五清少のこたへ也
一六后宮の詞也
一七文言はなかりし也
一八只是はかりにてはあらじと也
一九齋院御歌
二〇此の御音信を始にて、此ののちより申し通はし給ふと也
二一書きなほしなどし給ふなるべし、執し給ふさま也
二二齋院の御使におくらるる祿也
二三正月のきぬの色也
二四白きに赤きがはえあへるさま也
二五使のろくをかも、猶心ことに書き汚し、多く御用意見えたる。御使に、白き織物の單衣、蘇枋なるは梅なめりかし。雪の降りしきたるに、かづきて參るもをかしう見ゆ。此の度の御返事を、知らずなりにしこそ口惜しかりしか。

○ついたちの日——勘物云、長徳元年正月一日乙卯雪降。

○うへにてつぼねへいととう——后宮の御方にて、清少の局へ早朝におりしにも。

○さぶらひのおさなるもの——侍の長也。年勞ある心なるべし。帶刀長などいふ心にや。

○わなゝき出でたり——是奉らむなどふるひ〳〵いふさま也。寒げなるさまなるべし。

○齋院より——選子内親王也、村上天皇皇女、紹運錄云、號大齋院、歴五代。也足軒御說云、選子を大齋院と申すは、圓融院より後一條院まで、五代の齋院たるによりて也。

○ひとりねむじてあぐる——清少ひとりしては、あげがたきをこらへ念じてあぐる也。

○げにいととかりけり——清少のいかでかいそぎ侍らざらむといふゆゑ、まことに早きあげやうぞやとの給ふにや。

二六すきたる也
二七后宮の御返歌を見ざりしと也
一雪の日數のこりしさま也
二彼の年の内晦日までもあらじとのみ申せし人人に、勝ちたる心ちすると也
三清少とあらそふ人々の猶いふ也
四正月三日也、后宮の參内し給ふ也
五直曹に也
六后宮也
七清少の心也

○うづち二つを、うづゑの——卯槌、卯杖皆前に註す。江次第二小書曰、漢宮儀云、正月卯日以二桃杖一作二剛卯杖一歷レ鬼云々。

○山とよむをのの——歌、山とよむは山にひびく心也。「山下とよみゆく水の」と古今によみし詞也。山中ひびきて、斧の音かとて尋ねみれば、此の祝杖をつく音ぞと也。卯杖を祝杖といふ事前に註す。

○すはうなるは梅なめり——赤く見ゆるは梅の衣也と也。桃華御說に、梅表裏蘇芳。十二月より正月に至る云々。

雪の山は、まことに越のにやあらむと見えて、消えげもなし。黑くなりて、見るかひもなき樣でしたる。「勝ちぬる心地して、いかで十五日待ちつけさせむと念ずれど「七日をだにえ過ぐさじ」と猶云へば、いかでこれ見はてむと、皆人思ふ程に、俄に三日内へ入らせ給ふべし。いみじう口惜しく、此の山のはてを知らずなりたむ事と、まめやかに思ふ程に、人も、「げにゆかしがりつるものを」など云ふ。御前にも、仰せらる。同じくは云ひあてて、御覽ぜさせむと思へるかひなければ、御物の具運び、いみじう騷がしきにあはせて、木守といふ者の、築土の程に願さして居たるを、緣のもと近く呼びよせて、「此の雪の山いみじく守りて、童などに踏み散させ毀たせて、十五日までさぶらはせ。よく〳〵守りて、其の日にあたらば、めでたき祿賜はせむとす。私にも、いみじきよろこびいはむ」など語ひて、常に臺盤所

八十五日までといひし事也
九人内の道具也
一〇さしあはせて也
一一廂さしかけて也
一二清少の木守にいひつくる詞也
一三十五日になりたらは也
一四下すなどのくるゝ所の菓子也
一五木守がよろこびて也
一六清少のことは也
一七此のわがいふ子細をいへと也
一八后宮の入内也
一九清少も禁中に侍りて、さて里へ出でし也
二〇禁中の奉公人也
二一是らをつかはして也
二二木守がさま也

枕草子

の人、下衆などに乞ひて、くるるくだ物や何やと、いと多く取らせたれば、うち笑みて、「いとやすき事、たしかに守り侍らむ。童などぞ登り侍らむ」と云へば、「それを制して聞かざらむ者は、事の由を申せ」など云ひ聞かせて、入らせ給ひぬれば、七日までさぶらひて出でぬ。其の程も、これがうしろめたきまゝに、おほやけ人、すまし、をさめなどして、絶えずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどを遣りたれば、拝みつる事など、歸りては笑ひあへり。

○雪の山は、まことにこしのにやあらむ。きえげもなし——前にしら山の觀音これきやさせ給ふなと、いひし首尾也。彼の本歌に、「消え果つる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける」とよみしごとく、越路の雪やらむ消ゆる氣もなしと也。

○にはかに三日うちへ——勘物云、入内事無二所見一若密儀歟云々。

○人もげにゆかしがりつる物をなど——清少のみならず人々も、此の雪山のはてゆかしがりし物をと也。

○こもりといふもの——木守、山守とてあり。御庭木など守る物なるべし。

○めでたきろく賜はせむ——后宮の俸祿あらむと也。たばかりていへるにや。

次に私にもとは清少の也。

○だいばん所の人、げすなどにこひて——臺盤所はいまの臺所也。菓子何角を

二三すまし、おさめなど踏り來てわらふ也

枕草子

一 夜明るゝ其のまゝ也
二 一兩日をまたできゆらむ事よゝ也
三 下女かへりて告ぐる詞也
四 木守がいひし詞を下女がかたる也
五 やくそくの祿をあらはす也
六 清少の心也
七 早く也
八 句
九 十五日のあさ也

乞ひとりて木守にとらせたる也。

○其のほどにもこれがうへうしろめたきまゝに——清少禁中に七日まで候ふほども、此の雪山の事心もとなかりしと也。

○すましをさめ——すましは、須磨の卷に、ひすましとある物にや。細流いやしき女也云々。孟津抄下女也。最下の物也云々。をさめは、八雲抄下女也云々。

須磨の卷にをさめみかはやうどと有り。禁祕抄、長日御厠人と書けり。

里にても、あくるすなはち、これを大事にして見せにやる。十日のほどには、「五六尺ばかりあり」と云へば、嬉しく思ふに、十三日の夜、雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらむと、いみじうくちをし。今一日もまちつけでと、よるも起き居てなげけば、聞く人も物ぐるほしと笑ふ。人の起きて行くに、やがて起きいで、下衆おこさするに、更に起きねば、にくみ腹だたれて、起きいでたるを遣りて見すれば、「わらふだばかりになりて侍る。木守いとかしこう、わらはべも寄せて守りて、明日あさてまでもさぶらひぬべし。祿賜はらむ」と申す」と云へば、いみじく嬉しく、いつしか明日にならば、いと疾う歌よみて、物に入れて參らせむと思ふも、いと心もとなうわびしう。まだくらきに、大きなる折櫃などもたせて、「之に白からむ所、ひたものの入れても來。きたなげならむはかき棄てて」など、云ひくゝめて遣りたれば、いと疾く、もたせてやりつる物ひきさげて、「はやう失せ侍りにけり」

一〇雪の事也
一一持て來れ也
一二下女の詞也、雪山はさくなりしといふ也
一三清少の心也
一四誦
一五清少詞
一六掬塵ほどありし事也
一七取りにゆきし下女の答也
一八禁中におはします后宮の御かたより也
一九清少の心
二〇清少の返事の詞也
二一清少直には后宮へ申さで御取次の人のかたへいひやる詞也

と云ふに、いとあさまし。をかしうよみ出でて、人にも語り傳へさせむと、うめき誦じつる歌も、いとあさましくかひなく、「いかにしつるならむ。昨日さばかりありけむ物を、夜のほどに消えぬらむ事」と云ひ屈ずれば、「木守が申しつるは、『昨日いと暗うなるまで侍りき。祿を賜はらむと思ひつるものを、賜はらずなりぬる事』と、手をうちて申し侍りつる」と云ひ騒ぐに、内より仰言ありて、「拠て雪は今日までありつや」との給はせたれば、いとねたく口をしけれど、「年のうち朔日までだにあらじ」と、人々啓し給ひし昨日の夕暮まで侍りしを、いとかしこしとなむ思ひ給ふる。今日までは、あまりの事になむ。夜のほどに、人のにくがりて、取り棄て侍るにやとなむ推しはかり侍る』と啓せさせ給へ」と聞えさせつ。

○七日の御節供のおろし——正月七日七種の御粥をたてまつる事也。前註。これは后宮の御膳のすべりを、をさめ、すましなどにもたせて木守がかたへやる也。

○人のおきてゆくにやがて——十四日の朝也。人のおき出でたるにいひつけて下女をおこさする也。

○わらふだばかり——いせ物語に、わらふだのおほきさしてとあり。圓座也といへり。彼の雪のえんざほどにてのこりしと也。

○をりびつ——折櫃也、桐壺卷にをりびつ物、こものとあるを、をりうづ物と

一后宮へ清少のまゐる也
二取りにやりし物の事也
三をりびつのふたばかり也
四彼の雪に歌そへてまゐらせむとおもひし事を
五雪のいろをかたる也
六后宮の御詞也
七十四日の事也
八人のにくみてとり捨て侍るにもやと、清少の返事にいひし事也

よむ也。

○もたせてやりつる物——彼のをりびつなど引きさげてかへりたる也。

○いひくむずれば——云屈也。昨日までありし雪の、夜の程にきえぬらむ事、まことしからずといひつめたる心也。理窟にいひつめし心なるべし。

○きのふの夕ぐれまで侍りしをいとかしこしと——十四日まで侍りしは賢く申しあてたると思ふと、まけず口に申す詞也。

さて二十日に參りたるにも、まづ此の事を、御前にてもいふ。皆消えつとて、蓋のかぎりひきさげてもて來りつる、ぼうしのやうにて、すなはちまうで來りつるが、あさましかりし事、物の蓋に、小山うつくしう作りて、白き紙に、歌いみじく書きて、參らせむとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、「かう心に入れて思ひける事を、たがへたれば罪得らむ。まことには、四日の夕さり、侍どもやりて、取り棄てさせしぞ。かへり事に、いひあてたりしこそをかしかりしか。その翁出できて、いみじう手をすりていひけれど、『仰言ぞ。かのよりきたらむ人に、かうきかすな。さらば屋うちこぼたせむ』といひて、左近のつかさ、南の築土の外に皆取り棄てし。『いと高くて、多くなむありつ』と云ふなりしかば、げに二十日までも待ちつけて、ようせずば、今年の初雪にも降り添ひなまし。うへにも聞し召して、『いと思ひよりがたくあらがひたり』と、殿上人などにも

九 后宮の御意にて取りすつるぞと也
一〇とり捨てたるといふなと也
一一屋也
一二木守が家をこぼたせはらはむと也
一三イの人
一四外也
一五句
一六わろくしたらば也
一七久しくきえぬ事をの給ふ詞也
一八とり捨てたりといひあらはしたれは清少の勝ちたると同然と也
一九后宮也
二〇清少の詞也
二一かくうき事を承りてと也
二二一條院も后宮へおはして也
二三勅言也

仰せられけり。さてもかの歌をかたれ。今はかくいひあらはしつれば、同じごと勝ちたり。かたれ」など、御前にもの給はせ、人々もの給へど、「何せむにか、さばかりの事をうけ給はりながら啓し侍らむ」など、まめやかにうく、心うがれば、うへも渡らせ給ひて、「まことに年ごろは、多くの人なめりと見つるを、これにぞあやしく思ひし」など仰せらるゝに、いとどつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。

「いであはれ、いみじき世の中ぞかし。後に降り積みたりし雪を、うれしと思ひしを、『それはあいなし』とて、『かき捨てよ』など仰言侍りしか」と申せば、げに勝たせじとおぼしけるならむ」と、うへも笑はせおはします。

○ぼうしのやうにて——頓子にや、物のふたをいただきてかへりたるさまなるべし。

○から心に入れて思ひける事をたがへたればつみうらむ——清少のかほど用意したる事を、たがへ給ひて隠し果て給はば來世の罪やうべきと也。彼の雪山のなくなりしは后宮の取りすてさせ給ひしとかたりあらはさせ給ふ詞也。

○そのおきないできて——彼の雪とり捨つる時、木守が詫びたるよしを侍共の申し上げたる事を、かたらせ給ふ也。

○かのよりきたらむ人に——清少のたのみおきしをさしていふ也。

○さらば、やうちこぼたせむ——此の事を清少に告げたらば、このついでに廂

二四清少の心也
二五清少の詞也
二六正月一日の雪の事也
二七勅言也

したる家をこぼたせむぞと也。

○左近のつかさ南のついぢのとに——左近の官人雪を捨てたる也。イ本左近のつかさの南のついぢ、左近の陣の南の築地の外へ雪を捨てたる也。

○うへもきこしめして——一條院も、此の清少の雪山をつよくいひし事をきこしめしけると、后宮のかたらせ給ふ也。

○おほくの人なめりと見つるを——年頃は大體の人と思し召しけるを、此の雪の日數をいひあてたるに、奇特におぼしめすと也。

○げにかたせじとおぼしけるならむ——まことにはじめより清少にかたすまじきと、后宮のおぼしけるならむと、主上の御詞也。

春曙抄四終

昭和七年四月十六日印刷
昭和七年四月十六日發行

版權所有・數學・文藝・12

發行所　東京市神田區一ツ橋通町三番地　岩波書店

印刷者　東京市本所區緑町一丁目二七番地ノ二　守岡功雄

製本者　東京市神田區一ツ橋通町三番地　岩波茂雄

校訂者　池田龜鑑

定價四十錢

既刊第一回配本　上卷

電話　東京　三三〇八・九一〇・三一〇〇
振替口座　東京　三一一二
電信電話番號　東京　三三〇八・九一〇・三一〇〇

印刷　株式會社秀英舍

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の壟占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に贈ると謳稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を緊縛して數十册を强ふるが如き、果して其揭言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の靈に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より忘して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の僞きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら選んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫教科書版目錄

裝幀　四六判　表紙フワイバー

第一編　古事記　幸田成友校訂　定價二十錢

第二編　白文萬葉集　上卷　佐佐木信綱校訂　定價一圓

第三編　白文萬葉集　下卷　佐佐木信綱校訂　定價八十錢

第四編　新訓萬葉集　上卷　佐佐木信綱編　定價八十錢

第五編　新訓萬葉集　下卷　佐佐木信綱編　定價六十錢

第六編　古今和歌集　尾上八郎校訂　定價四十錢

第七編　源氏物語　(一)　島津久基校訂　定價四十錢

第八編　源氏物語　(二)　島津久基校訂　定價四十錢

第九編　源氏物語　(三)　島津久基校訂　定價四十錢

第十編　源氏物語　(四)　島津久基校訂　定價六十錢

第十一編　源氏物語　(五)　島津久基校訂　(近刊)

第十二編 枕草子（春曙抄） 上卷 池田龜鑑校訂 定價四十錢
第十三編 枕草子（春曙抄） 中卷 池田龜鑑校訂 定價四十錢
第十四編 枕草子（春曙抄） 下卷 池田龜鑑校訂（近刊）
第十五編 大鏡 和田英松校訂 定價四十錢
第十六編 新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 定價六十錢
第十七編 平家物語 上卷 山田孝雄校訂 定價四十錢
第十八編 平家物語 下卷 山田孝雄校訂 定價六十錢
第十九編 徒然草 西尾實校訂 定價二十錢
第二十編 奥の細道（その他芭蕉翁紀行集） 伊藤松宇校訂 定價二十錢
第二十一編 日本永代藏 和田萬吉校訂 定價二十錢
第二十二編 世間胸算用 和田萬吉校訂 定價二十錢

附記——本叢書は、高等諸學校教科用に供するを目標として編輯したものであるが、一般國文學研究者に取つて非常に便利な書入本となり得ると信じます。

既刊書目

國文學

新訓 萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★★
新訓 萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★★
自文 萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★★
自文 萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★★
古事記 幸田成友校訂 ★
訓註 日本書紀 上卷 黑板勝美編 ★
訓註 日本書紀 中卷 黑板勝美編 ★★
古語拾遺 加藤玄智校訂 ★
水鏡 和田英松校訂 ★
大鏡 和田英松校訂 ★★
增鏡 和田英松校訂 ★★
三條西家本 榮花物語 三條西公正校訂 ★★
參考 伊勢物語 屋代弘賢校訂 ★
竹取物語 並附錄 島津久基校訂 ★
平家物語 上卷 山田孝雄校訂 ★★
平家物語 下卷 山田孝雄校訂 ★★
源氏物語（一） 島津久基校訂 ★★
源氏物語（二） 島津久基校訂 ★★
源氏物語（三） 島津久基校訂 ★★
土佐日記 池田龜鑑校訂 ★
紫式部日記 池田龜鑑校訂 ★
更級日記 西下經一校訂 ★
枕草子（春曙抄）上卷 池田龜鑑校訂 ★★
枕草子（春曙抄）中卷 池田龜鑑校訂 ★★
倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 ★
古今和歌集 尾上八郎校訂 ★★
新撰 山家集 佐佐木信綱校訂 ★★
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ★★
新訂 金槐和歌集 曾藤茂吉校訂 ★★
藤原定家歌論集（附定家全歌集） 佐佐木信綱校訂 ★★
法華義疏 上卷 聖德太子御製 花山信勝校譯 ★★
正法眼藏隨聞記 懷奘編 和辻哲郎校訂 ★
日蓮上人文抄 姉崎正治校注 ★★
歎異抄 金子大榮校訂 ★
徒然草 西尾實校訂 ★
方丈記 山田孝雄校訂 ★
花傳書 世阿彌著 野上豐一郎校訂 ★
申樂談義 世阿彌著 野上豐一郎校訂 ★
能作書・覺書・條條口傳・至花道書 世阿彌著 野上豐一郎校訂 ★
入木道三部集（附本朝能者傳） 岡鹿校訂 ★
奥の細道 その他 芭蕉紀行文集 伊藤松宇校訂 ★
芭蕉七部集 伊藤松宇校訂 ★★★
芭蕉連句集 小宮豐隆編 ★★★
蕪村七部集 伊藤松宇校訂 ★★
風俗文選 伊藤松宇校訂 ★★
鶉衣 石田元季校訂 ★★
おらが春・我春集 一茶作 荻原井泉水校訂 ★
俳風柳多留 上卷 西原柳雨校訂 ★★

誹風柳多留 中卷 西原柳雨校訂 ★★
誹風柳多留 下卷 西原柳雨校訂 ★★
萬載狂歌集 野崎左文校訂 ★
德和歌後萬載集 野崎左文校訂 ★
松の葉 藤田德太郎校註 ★
松の落葉 藤田德太郎校註 ★★
閑吟集 附 狂言小歌集 室町小歌拾遺集 藤田德太郎校註 ★
好色一代男 西鶴作 和田萬吉校訂 ★
好色一代女 西鶴作 和田萬吉校訂 ★
好色五人女 西鶴作 和田萬吉校訂 ★
日本永代藏 西鶴作 和田萬吉校訂 ★
世間胸算用 西鶴作 和田萬吉校訂 ★
西鶴織留 西鶴作 和田萬吉校訂 ★
武家義理物語 西鶴作 和田萬吉校訂 ★
椿說弓張月 上卷 曲亭馬琴作 和田萬吉校訂 ★★
椿說弓張月 中卷 曲亭馬琴作 和田萬吉校訂 ★★
椿說弓張月 下卷 曲亭馬琴作 和田萬吉校訂 ★★

國性爺合戰 鑓の權三重帷子 近松門左衛門作 和田萬吉校訂 ★
曾我會稽山 心中天の網島 近松門左衛門作 和田萬吉校訂 ★
胡蝶物語 曲亭馬琴作 和田萬吉校訂 ★★
浮世風呂 式亭三馬作 和田萬吉校訂 ★★
浮世床 式亭三馬作 和田萬吉校訂 ★
東海道膝栗毛 十返舍一九作 和田萬吉校訂 ★★★
加賀鳶 默阿彌作 河竹繁俊校訂 ★★
赤垣源藏・仲光 默阿彌作 河竹繁俊校訂 ★
忍ぶの惣太 縮屋の新助 默阿彌作 河竹繁俊校訂 ★★
孝子善吉 默阿彌作 河竹繁俊校訂 ★★
鼠小僧 默阿彌作 河竹繁俊校訂 ★★
實錄先代萩 默阿彌作 河竹繁俊校訂 ★★★
お靜禮三 笠森お仙 默阿彌作 河竹繁俊校訂 ★★
辨天小僧 鳩の平右衛門 默阿彌作 河竹繁俊校訂 ★★

小說・戲曲・詩歌・隨筆・評論

こゝろ 夏目漱石著 ★★
道草 夏目漱石著 ★★
行人 夏目漱石著 ★★★
漾虛集 夏目漱石著 ★★
草枕 夏目漱石著 ★
坊つちやん 夏目漱石著 ★
五重塔 幸田露伴作著 ★
風流佛・一口劍 幸田露伴作著 ★
二人女房 尾崎紅葉著 ★
觀音岩 前篇 川上眉山著 ★★
觀音岩 後篇 川上眉山著 ★★
たけくらべ・にごりえ 樋口一葉著 ★
うたかたの記(他三篇) 森鷗外著 ★
新曲浦島・新曲赫映姫 坪内逍遙著 ★
運命論者 他二篇 國木田獨步著 ★
源をぢ 他二篇 國木田獨步著 ★
號外 他六篇 國木田獨步著 ★
櫻の實の熟する時 島崎藤村著 ★★

千曲川のスケッチ 島崎藤村著 ★
幸福者 武者小路實篤著 ★★
蒲團・一兵卒 田山花袋著 ★
田舍教師 田山花袋著 ★★
小僧の神樣 他十篇 志賀直哉著 ★★
和解・或る男、其姉の死 志賀直哉著 ★★
陸奧直次郎 長與善郎著 ★
青銅の基督 長與善郎著 ★
偸盜 芥川龍之介著 ★
厭世家の誕生日(他六篇) 佐藤春夫著 ★★
入江のほとり 正宗白鳥著 ★
生まざりしならば 正宗白鳥著 ★
大石良雄 野上彌生子著 ★
海神丸 野上彌生子著 ★
出家とその弟子 倉田百三著 ★★
布施太子の入山 倉田百三著 ★
その妹 武者小路實篤著 ★

人間萬歲 武者小路實篤著 ★
波 山本有三著 ★★★
病牀六尺 正岡子規著 ★★
墨汁一滴 正岡子規著 ★★
仰臥漫錄 正岡子規著 ★★
子規歌集 正岡子規著 ★
左千夫歌集 齋藤茂吉 土屋文明 選 ★
左千夫歌論抄 齋藤茂吉 土屋文明 編 ★★
上田敏詩抄 茅野蕭々編 ★★
晚翠詩抄 土井晚翠著 ★★
藤村詩抄 島崎藤村自選 ★★
有明詩抄 蒲原有明著 ★★
泣菫詩抄 薄田泣菫著 ★★
譯文 逍遙遺稿 笹川臨風 金築松桂 譯 ★★
歌舞音樂略史 小中村清矩著 ★★
俗樂旋律考 上原六四郎著 ★
蘭學事始 杉田玄白著 野上豐一郎校訂 ★

茶の本 岡倉覺三著 村岡博譯 ★
綱島梁川集 安倍能成編 ★★
清澤文集 清澤滿之著 ★★
福澤撰集 福澤諭吉著 ★★★
北村透谷集 島崎藤村編 ★★
海舟座談 巖本善治編 ★★

外國文學(小說・戲曲・詩)

譯註 杜詩 卷之一 漆山又四郎譯註 ★★
譯註 杜詩 卷之二 漆山又四郎譯註 ★★
譯註 杜詩 卷之三 漆山又四郎譯註 ★★
譯註 杜詩 卷之四 漆山又四郎譯註 ★★★
譯註 陶淵明集 漆山又四郎譯註 ★★
譯註 唐詩選 上卷 漆山又四郎譯註 ★★
譯註 唐詩選(附作者略傳)下卷 漆山又四郎譯註 ★★
即興詩人 上卷 森鷗外譯 ★★
即興詩人 下卷 森鷗外譯 ★★
ブランド イプセン作 角田俊譯 ★★★★

幽靈曲　ストリントベルク作　小宮豐隆譯　★
稻妻　ストリントベルク作　小宮豐隆譯　★
父　ストリントベルク作　小宮豐隆譯　★
令孃ユリエ　ストリントベルク作　茅野蕭々譯　★
オネーギン　プーシュキン作　米川正夫譯　★★
イワーン・イワーノヰッチとイワーン・ニキーフオロヰッチとが喧嘩をした話　ゴーゴリ作　原久一郎譯　★
檢察官　ゴーゴリ作　米川正夫譯　★★
現代のヒーロー　レールモントフ作　中村白葉譯　★★
皇帝フョードル　ア・カ・トルストイ作　除村吉太郎譯　★
プウニンとパブリン　トウルゲェニエフ作　小沼達譯　★
罪と罰第一卷　ドストエーフスキイ作　中村白葉譯　★★
罪と罰第二卷　ドストエーフスキイ作　中村白葉譯　★★
罪と罰第三卷　ドストエーフスキイ作　中村白葉譯　★★★
カラマーゾフの兄弟第一卷　ドストエーフスキイ作　米川正夫譯　★★★★
カラマーゾフの兄弟第二卷　ドストエーフスキイ作　米川正夫譯　★★★
カラマーゾフの兄弟第三卷　ドストエーフスキイ作　米川正夫譯　★★★★
カラマーゾフの兄弟第四卷　ドストエーフスキイ作　米川正夫譯　★★★★

貧しき人々　ドストエーフスキイ作　原久一郎譯　★★
戰爭と平和第一卷　トルストイ作　米川正夫譯　★★★★★
戰爭と平和第二卷上　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和第二卷下　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和第三卷上　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和第三卷下　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和第四卷上　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和第四卷下　トルストイ作　米川正夫譯　★★
イヴン・イリッチの死　トルストイ作　米川正夫譯　★
結婚の幸福　トルストイ作　米川正夫譯　★★
光あるうちに光の中を歩め　トルストイ作　米川正夫譯　★
クロイツェル・ソナタ　トルストイ作　米川正夫譯　★★
復活上卷　トルストイ作　中村白葉譯　★★★
復活中卷　トルストイ作　中村白葉譯　★★
復活下卷　トルストイ作　中村白葉譯　★★
闇の力　トルストイ作　米川正夫譯　★
生ける屍　トルストイ作　米川正夫譯　★

櫻の園　チエーホフ作　米川正夫譯　★
伯父ワーニャ　チエーホフ作　米川正夫譯　★
サーニン上卷　アルツイバーシエフ作　中村白葉譯　★★★
サーニン下卷　アルツイバーシエフ作　中村白葉譯　★★
賢者ナータン　レッシング作　大庭米治郎譯　★★
ヰルヘルム・マイスター上卷　ゲーテ作　林久男譯　★★★★
ヰルヘルム・マイスター下卷　ゲーテ作　林久男譯　★★★
ファウスト第一部　森鷗外譯　★★★
ファウスト第二部　森鷗外譯　★★★★
ヴレンシュタイン　シルレル作　鼓常良譯　★★★
若いエルテルの惱み　ゲョエテ作　茅野蕭々譯　★★
ヴイルヘルム・テル　シラー作　櫻井政隆譯　★★
全譯グリム童話集第一冊　金田鬼一譯　★★
全譯グリム童話集第二冊　金田鬼一譯　★★
全譯グリム童話集第三冊　金田鬼一譯　★★
全譯グリム童話集第四冊　金田鬼一譯　★★
全譯グリム童話集第五冊　金田鬼一譯　★★

全譯グリム童話集第六冊　金田鬼一譯　★★
全譯グリム童話集第七冊　金田鬼一譯　★★
ゲエテとの對話抄　エッケルマン著　龜尾英四郎譯　★★★
春の目ざめ　ヴェデキント作　野上豐一郎譯　★
埋木　キリシュネル作　森鷗外譯　★
トオマス・マン短篇集1　實吉捷郎譯　★
トオマス・マン短篇集2　實吉捷郎譯　★
祖妣　グリルパルツェル作　岡本修助譯　★
みれん　シュニッツラ作　森鷗外譯　★★
アナトール　シュニッツラ作　小宮豐隆譯　★★
青い鳥　メーテルリンク作　若月紫蘭譯　★★
ポリウクト　コルネイユ作　木村太郎譯　★
人間嫌ひ　モリエール作　關口存男譯　★
マノン・レスコオ　アベ・プレヴオ作　河盛好藏譯　★★
從兄ポンス上卷　バルザック作　水野亮譯　★★★
從兄ポンス下卷　バルザック作　水野亮譯　★★★
知られざる傑作（他五篇）　バルザック作　水野亮譯　★★

カルメン　メリメ作　杉捷夫譯　★
コロンバ　メリメ作　杉捷夫譯　★★
エトルリアの壺（外五篇）　メリメ作　杉捷夫譯　★
日の出前　ハウプトマン作　橋本忠夫譯　★★
希臘の春　ハウプトマン作　城田皓一譯　★
ソアーナの異教徒　ハウプトマン作　奧津彥重譯　★★
水の上　モーパッサン作　吉江喬松譯　★★
ピエルとジャン　モウパッサン作　前田晁譯　★★
生の誘惑（原名イヴエット）　モウパッサン作　前田晁譯　★
お菊さん　ピエル・ロチ作　野上豐一郎譯　★★
氷島の漁夫　ピエル・ロチ作　吉江喬松譯　★★
若き日の手紙　フイリップ作　外山楢夫譯　★★
愛と死との戲れ　ロマン・ロラン作　片山敏彥譯　★
法王廳の拔穴　アンドレ・ジッド作　石川淳譯　★★★
クオレ愛の學校上卷　アミーチス著　前田晁譯　★★
クオレ愛の學校下卷　アミーチス著　前田晁譯　★★
恐ろしき媒　ホセ・エチエガライ作　永田寬定譯　★★

ブレイク抒情詩抄　壽岳文章譯　★
小公子　バアネット著　若松賤子譯　★★
人と超人　ショウ作　市川又彥譯　★★★
鰥夫の家　ショウ作　市川又彥譯　★
思想の達し得る限り（原名メトセラ時代に歸れ）　ショウ作　相良德三譯　★★★
緋文字　ホーソン作　佐藤清譯　★★★

哲學・自然科學・文學・宗教・教育

ソクラテスの辯明 クリトン　プラトン　久保勉・阿部次郎譯　★
プロタゴラス　プラトン　菊池榮一郎譯　★
純粹理性批判上卷　カント　天野貞祐譯　★★★★
實踐理性批判　カント　波多野精一・宮本和吉譯　★★
プロレゴーメナ　カント　桑木嚴翼・天野貞祐譯　★★
哲學體系　スピノザ　小尾範治譯　★★★
知性改善論　スピノザ　畠中尚志譯　★
哲學とは何か、イマヌエル・カント　ヴインデルバンド著　河東涓譯　★
歷史と自然科學・道德の原理に就て・聖　ヴインデルバンド著　篠田英雄譯　★

認識の對象 リッケルト著 山内得立譯 ★★★
作り上げた利害 ベナベンテ作 永田寛定譯 ★
子守唄 シエルラ作 永田寛定譯 ★
希臘羅馬神話 バルフィンチ作 野上彌生子譯 ★★★★
フォースタス博士 マーロウ作 松尾相譯 ★
バーンズ詩集 中村爲治譯 ★★
エヴァンジェリン ロングフェロウ作 齋藤悦子譯 ★
クリスマス・カロル ディッケンズ作 森田草平譯 ★
ブラウニング サウル 齋藤勇譯 ★
七大哲人 オイケン著 安倍能成譯 ★★
科學の價値 ポアンカレ著 田邊元譯 ★★
科學と方法 ポアンカレ著 吉田洋一譯 ★★★
科學者と詩人 ポアンカレ著 平林初之輔譯 ★★
將來の哲學の根本命題 フォイエルバッハ著 植村晋六譯 ★★
史的に見たる科學的宇宙觀の變遷 スワンテ・アーレニウス著 寺田寅彦譯 ★★
自然認識の限界について・宇宙の七つの謎 デュボアレーモン著 坂田徳男譯 ★
自然に於ける美・藝術の一般的意義 ソロヴィヨフ著 高村理智夫譯 ★

ケーベル博士隨筆集 久保勉譯 安倍能成編 ★★
カントとゲエテ ジムメル著 谷川徹三譯 ★
ファーブル昆蟲記 林達夫 山田吉彦譯
既刊 定價各★★
第二分冊・第九分冊・第十分冊
第十二分冊・第十三分冊・第十四分冊
第十七分冊・第十八分冊
チャールズ・ダーウヰン F・ダーウヰン著 小泉丹譯 ★★
種の起原 上巻 ダーウヰン著 小泉丹譯 ★★★
人及び動物の表情について ダーウヰン著 濱中濱太郎譯 ★★★★
雜種植物の研究 メンデル著 小泉丹譯 ★
生命の不可思議 上巻 ヘッケル著 後藤格次譯 ★★
生命の不可思議 下巻 ヘッケル著 後藤格次譯 ★★★
回想のセザンヌ 有島生馬譯 ★
この人を見よ ニーチェ著 安倍能成譯 ★★
ミル自傳 西本正美譯 ★★★
佛蘭西文學史 序説 ブリュンチエール著 關根秀雄譯 ★★★
伊太利文藝復興期の文化 上巻 ブルックハルト著 村松恒一郎譯 ★★★

ペーター！論集 田部重治譯 ★★
ラフカディオ・ヘルン東西文學評論 十一谷義三郎 三宅幾三郎譯 ★★★
戀愛論 上巻 スタンダル著 前川堅市譯 ★★★
戀愛論 下巻 スタンダル著 前川堅市譯 ★★
戀愛と結婚 上巻 エレン・ケイ著 原田實譯 ★★
戀愛と結婚 下巻 エレン・ケイ著 原田實譯 ★★
イミターシヨ・クリスチ（基督のまねび） 内村達三郎譯 ★★★
アウグスティンの懺悔錄 フォン・ハルナック著 山谷省吾譯 ★
唯一者とその所有 上巻 スチルネル著 草間平作譯 ★★
唯一者とその所有 下巻 スチルネル著 草間平作譯 ★★★
エミイル（第一篇） ルソオ著 平林初之輔譯 ★
エミイル（第二篇） ルソオ著 平林初之輔譯 ★★
エミイル（第三篇） ルソオ著 平林初之輔譯 ★
懺悔錄 上巻 ルソオ著 石川戯庵譯 ★★★
懺悔錄 中巻 ルソオ著 石川戯庵譯 ★★★
懺悔錄 下巻 ルソオ著 石川戯庵譯 ★★★
獨逸國民に告ぐ フイヒテ著 大津康譯 ★★

文明論之概略 福澤諭吉著 ★★

法律・社會・政治・經濟

アテナイ人の國家 アリストテレス 原隨園譯 ★★
法の精神 上巻 モンテスキュー著 宮澤俊義譯 ★★
法の精神 下巻 モンテスキュー著 宮澤俊義譯 ★★
權利のための鬪爭 イエーリング著 日沖憲郎譯 ★
民約論 ルソオ著 平林初之輔譯 ★★
國富論 上巻 スミス 氣賀勘重譯 ★★★
勞働者綱領 ラッサアル 小泉信三譯註 ★
哲學の貧困 マルクス 木下半治 淺野晃譯 ★★★
資本論初版鈔 マルクス著 長谷部文雄譯 ★★
猶太人問題を論ず マルクス 久留間鮫造 細川嘉六譯 ★
自然辯證法 上巻 エンゲルス 加藤正 加古祐二郎譯 ★★
自然辯證法 下巻 エンゲルス 加藤正 加古祐二郎譯 近刊
住宅問題 エンゲルス著 加田哲二譯 ★★
原始基督教史考・基督教の成立 エンゲルス カウツキー 喜多野清一譯 ★

家族・私有財産及國家の起源 エンゲルス著 西雅雄譯 ★★
フォイエルバッハ論 エンゲルス著 佐野文夫譯 ★
反デューリング論 上巻 エンゲルス著 長谷部文雄譯 ★★
空想より科學へ エンゲルス 淺野晃譯 ★
マルクス・エンゲルス傳 リヤザノフ著 長谷部文雄譯 ★★
ドイッチェ・イデオロギー マルクス エンゲルス リヤザノフ編 三木清譯 ★
帝國主義 レーニン 長谷部文雄譯 ★★
唯物論と經驗批判論 上巻 レーニン 佐野文夫譯 ★★
唯物論と經驗批判論 中巻 レーニン 佐野文夫譯 ★★
唯物論と經驗批判論 下巻 レーニン 佐野文夫譯 ★★
何を爲すべきか レーニン 平田良衞譯 ★★
經濟學及課税之原理 リカアドォ著 小泉信三譯 ★★★★
道徳の經濟的基礎 シュタウディンガー著 草間平作譯 ★★
藝術經濟論 ラスキン 西本正美譯 ★★
建築の七燈 ラスキン著 高橋松川譯 ★★★
この後の者にも ラスキン著 西本正美譯 ★★
地代論 ロードベルトゥス著 山口正吾譯 ★★★

婦人論 上巻 ベーベル 草間平作譯 ★★★
婦人論 下巻 ベーベル 草間平作譯 ★★
近代民主政治 一巻 ブライス著 松山武譯 ★★★
近代民主政治 二巻 ブライス著 松山武譯 ★★★
近代民主政治 三巻 ブライス著 松山武譯 ★★★
近代民主政治 四巻 ブライス著 松山武譯 ★★★
社會學上より見た『藝術』第一部 ギュイヨー 大西克禮 小方庸正譯 ★★
社會學上より見た『藝術』第二部上 ギュイヨー 大西克禮 小方庸正譯 ★★
社會學上より見た『藝術』第二部下 ギュイヨー 大西克禮 小方庸正譯 ★★
經濟要錄 佐藤信淵著 瀧本誠一校訂 ★★

御註文に就て

□此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。
□內容の嚴選 古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、飜譯に於ても最善を期します。
□最低の廉價 出來る丈安く手に入れら

れる樣に、小さい形の中に、深山の内容を盛る形式を採りました。

□購求の自由　しかも讀者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。

□印刷の鮮明、校正の精確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。

□體裁は菊半截判、紙裝、平福百穗畫伯裝幀

□活字は八ポイントを用ひました。

□約百頁を單位として星一つを以てそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。

□★一つを1に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。

□番號はただ發行順に從つて之を追ふものであります。

□★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。

□送料(及び定價)は左表の通りです。

	定價二十錢	送料二錢
★	四十錢	四錢
★★	六十錢	四錢
★★★	八十錢	六錢
★★★★		
★★★★★	一圓	六錢

□御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なのですから必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一割增に願ひます。

◇岩波文庫新刊書目◇

源氏物語　四　島津久基校訂　★★★

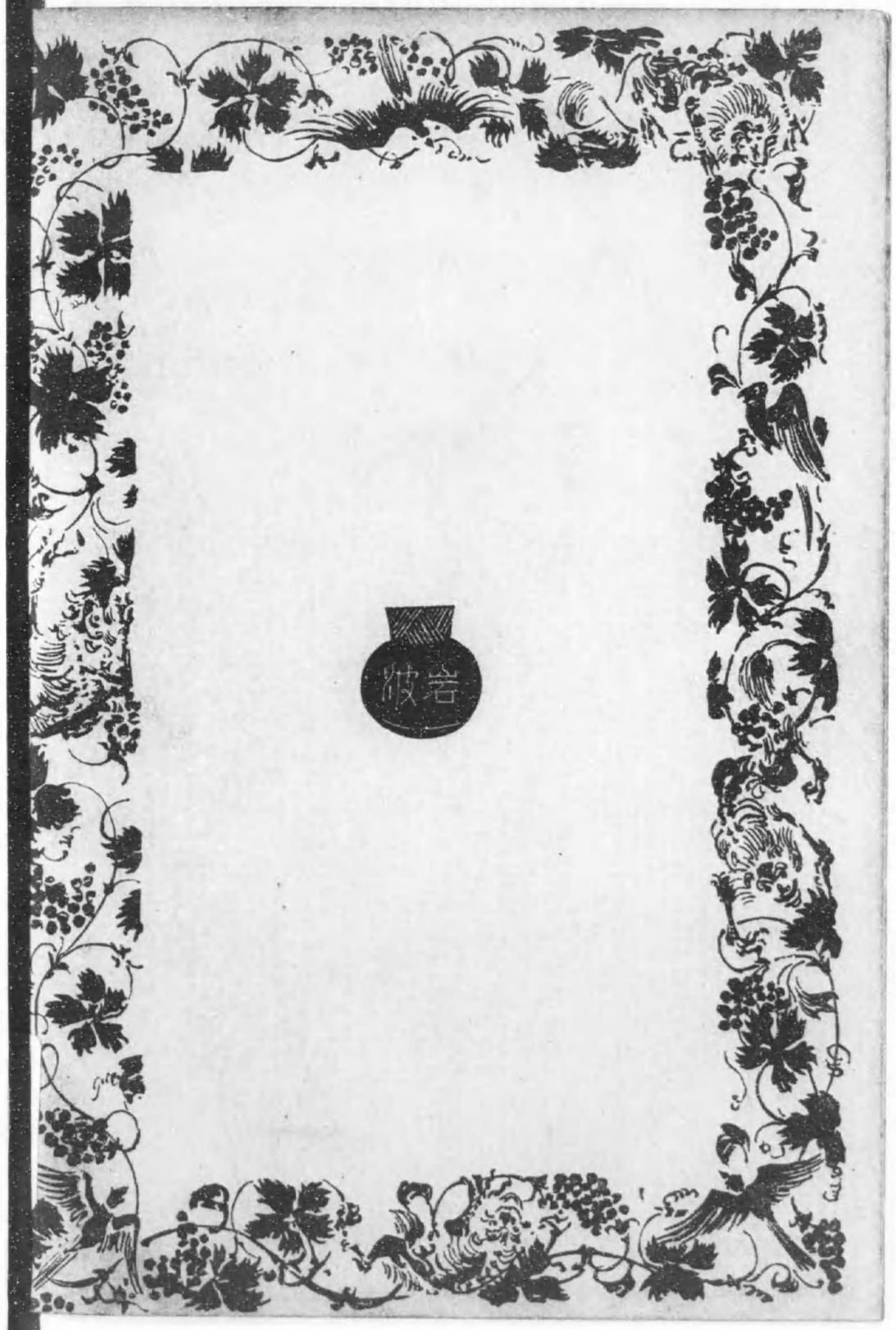
三條西家本榮花物語　中卷　三條西公正校訂　★★

煤煙　森田草平作　★★

支那小說集　通俗古今奇觀　青木正兒譯　★

獅子座の流星群　ロマン・ロラン作　片山敏彥譯　★

神聖家族或は批判的批判の批判　マルクス、エンゲルス著　三木清譯　★★★

史的に見たる科學的宇宙觀の變遷　スワンテ・アーレニウス著　寺田寅彥譯　★★

終